

坂戸市

かな い  
金井遺跡 B 区

住宅・都市整備公団坂戸入西地区土地区画整理事業関係  
埋蔵文化財発掘調査報告

—Ⅸ—

(第1分冊)

1994



金井遺跡B区全景



金井遺跡B区全景



第1 鑄造遺構群 (鍋・羽釜・鞆先などの日用品の生産遺構)



第1 群第1号 鑄込み跡 (鍋鑄型がまとめて出土)



第5 鑄造遺構群 (左側は梵鐘鑄造土壇群、右上は第2号溶解炉)



第5群第2号溶解炉 (炉底部には大きな石を詰めまわりの隙間には粘土を充填させる。修復して使用を試みた銅の溶解炉跡)



第11群  
第4号鋳造土塊  
(吹き差しフイゴの跡?)



第11群  
(白色粘土を張り込み作業面とする)



第8群  
第1号鋳造土塊  
(梵鐘鋳造の土塊)



第10群  
第1号鑄造土塚  
(掛け木の痕跡が見られる  
梵鐘鑄造の土塚)



第1号粘土採掘跡  
(鑄型や溶解炉の原料と  
なる粘土を採取した跡)



第85号土塚  
(正面中央に鍛冶炉を検出)



第10群第7号鈎造土壇出土梵鐘鈎型



梵鐘鈔型：龍頭



梵鐘鈔型：笠形～乳の間





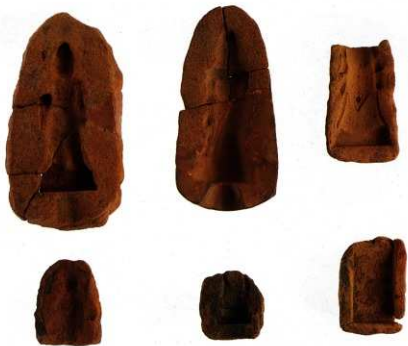
第5群第1号鉢込み跡・第1～3号鑄造土墳出土梵鐘鑄型



梵鐘鈔型：撞座



梵鐘鈔型：龍頭・孔



弘具鎚型：弘像



弘具鎚型：啓



仏具鋳型：釘隠しの飾り金具・獣脚



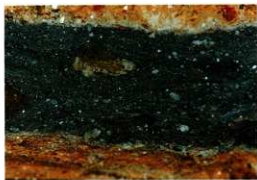
仏具鋳型：獣脚



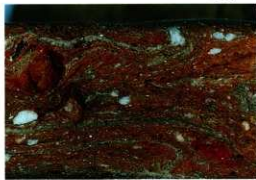
唐草文様入不明鋳型



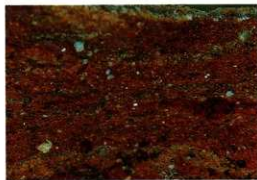
輸入陶磁器：青磁



胎土分析 1 (壘 SD22-49)



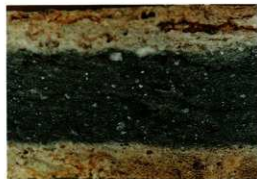
胎土分析 2 (壘 SK32-1)



胎土分析 3 (壘表採 5-15)



胎土分析 4 (壘 SE01-12)



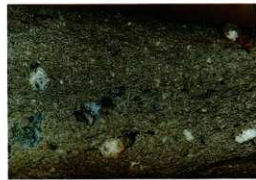
胎土分析 5 (片口鉢 SD22-40)



胎土分析10 (片口鉢 SE03-31)



胎土分析11 (内耳鍋 SD22-43)



胎土分析15 (内耳鍋 SD22-44)



胎土分析17 (鍋鑄型 SS01-12)



胎土分析18 (鍋鑄型 SS02-12)



胎土分析19 (梵鐘鑄型 SS10)



胎土分析20 (梵鐘鑄型 SS05)



胎土分析22 (容器鑄型 SS14-15)



胎土分析26 (羽口 SS05-52)



胎土分析27 (銅滓 SS08-122)



胎土分析28 (炉壁 SS05-27)



SS05-SSK 9



SS05-第1号鑄込み跡



SS05-炉体4号



SS07-SSK 1



SS08-SSK 3



SS08-SSK 3



SS08-第1号廃滓



SS08 Q-13-F





SS08 Q-13-h



SS10-SSK 1



SS10-SSK 7



SS10 Q-14-h



SS11 P-14-c



SS11 P-14-h



SS11 P-14-k



第1粘土探掘跡 Q-11-d

## 序

埼玉県坂戸市は、県中央部に位置し、近年の開発はめざましいものがあります。

このたび、坂戸市北西部の入西地区において、住宅・都市整備公団による土地区画整理事業が実施されることとなりました。当地に所在する埋蔵文化財の取り扱い、関係諸機関による協議が重ねられ、11か所の遺跡について当事業団が発掘調査を実施し、その記録を保存することになりました。

金井遺跡はそれらの遺跡の一つで、調査の結果、日本でもあまり調査例のない中世の鑄造遺跡であることが明らかとなりました。また出土した数々の鑄型から仏像・梵鐘・火舎の獸脚・容器・磬・鏡といった仏教用具と鍋・鉄瓶・羽釜・犁先など、什器や農具の生産を行っていたことがわかりました。金井遺跡で活躍した人々は、先進の技術と伝統的な秘伝技法のもとで生産活動を行っていた優れた鑄物師達であり、世に名を知られた大工物部氏の影響を受けた鑄造工房の可能性が考えられます。

また、この地域は、古来より鎌倉街道上道が通り、児玉党の入西・浅羽・小代・越生氏といった武蔵武士の活躍した地域でもあり、この鑄造工房は、これら中世の武士団との関係も推測される遺跡であります。

本書が歴史学、考古学、郷土史研究に少しでも寄与でき、また、埋蔵文化財の保護思想の普及・啓発及び教育・生涯学習の参考資料として、広くご活用いただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査における調整に御尽力いただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から本書の刊行に至るまで多大なる御協力をいただきました住宅・都市整備公団、同埼玉西宅地開発事務所、坂戸市教育委員会並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成6年10月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 荒井 桂

## 例 言

- 1 本書は、埼玉県坂戸市大字新堀字金井330-1番地他に所在する金井遺跡のうちB区に関する発掘調査報告書である。  
文化庁指示通知は平成元年10月3日付委保第5の1068号である。遺跡略号はKN I . Bである。
- 2 発掘調査は、住宅・都市整備公団坂戸入西地区土地区画整理事業に伴う事前調査である。埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課の調整のもと、住宅・都市整備公団の委託を受けた財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
- 3 入西地区土地区画整理事業関係の既刊発掘調査報告書は下記の通りである。

【金井遺跡】(A区)	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書	第86集	1989
【広面遺跡】	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書	第89集	1990
【塚の越遺跡】	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書	第101集	1991
【稻荷前遺跡】(A区)	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書	第120集	1992
【桑原遺跡】	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書	第121集	1992
【中耕遺跡】	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書	第125集	1993
【足洗遺跡】	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書	第136集	1994
【稻荷前遺跡】(B・C区)	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書	第145集	1994
- 4 金井遺跡B区の発掘調査は平成元年4月1日から平成2年9月30日まで実施した。報告書作成事業は、整理作業を平成4年4月1日から平成6年3月31日まで行い、印刷製本作業を平成6年4月1日から平成6年10月31日まで実施した。発掘調査及び整理事業の組織は2ページに記した。
- 5 分析・鑑定については下記へ委託した。

金属学的分析	新日本製鉄株式会社
炭化材樹種同定	バリノ・サーヴェイ株式会社
土器等胎土分析	第四紀地質研究所
- 6 遺跡の基準点測量および航空写真測量は朝日航洋株式会社に委託し、立体地形図の作成は、株式会社パスコ・株式会社大宮測技に委託した。
- 7 本書の執筆は資料部資料整理第1課の赤熊浩一が行った。
- 8 発掘調査における調査方法については、杉崎茂樹、馬橋泰雄、富田和夫、赤熊で協議を重ね進めた。また、整理方法および調査の成果については、富田との共同研究による。
- 9 図版作成・写真撮影は下記のものが行った。

図版作成及び遺物写真撮影	赤熊
発掘調査における写真撮影	杉崎、馬橋、富田、石塚和則、宮瀬交二、赤熊
口絵遺物写真は	折原基久氏、小川忠博氏に委託し、一部を赤熊が行った。
- 10 本書の編集は資料部資料整理第1課の赤熊浩一が担当した。
- 11 本書に掲載した資料は、平成6年度以降埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。
- 12 発掘調査および本書の作成にあたり、下記の機関並びに方々から御指導、御協力を賜った。

阿久津久、青村光夫、網野善彦、穴沢義功、荒川正夫、小野正敏、飯村均、石野律子、市村高男、井上喜久男、五十川伸矢、梅崎恵司、大江正行、大岡口承、香取忠彦、神崎勝、木津博明、斉藤弘、斎木秀雄、狭川真一、笹本正治、鋤柄俊夫、関清、津野仁、寺島文隆、葉賀七三男、原田一敏、原田義範、久田正弘、中山光夫、能登谷宜康、松井和幸、馬淵和雄、山中章、山本信夫、八重樫忠郎、吉岡康暢

(順不同・敬称略)

文化庁、東京国立博物館、東京国立文化財研究所、国立歴史民俗博物館、元興寺文化財研究所、群馬県埋蔵文化財調査事業団、栃木県文化振興事業団、千葉県文化財センター、神奈川県立埋蔵文化財センター、福島県文化センター、多賀城市埋蔵文化財調査センター、岩手県立博物館、岡山県古代吉備文化財センター、広島県埋蔵文化財センター、徳島県埋蔵文化財センター、大阪文化財センター、富山県埋蔵文化財センター、向日市埋蔵文化財センター、滋賀県文化財保護協会、栗東歴史民俗博物館、太宰府市教育委員会、北九州市教育委員会、荒尾市教育委員会、佐野郷土博物館、町田市立博物館、東京工業大学、早稲田大学、帝京大学山梨文化財研究所、武蔵考古学研究所

埼玉県立博物館、埼玉県立民俗文化センター、埼玉県立歴史資料館、埼玉県鋳物機械工業試験場、坂戸市教育委員会、鳩山町教育委員会、児玉町教育委員会、狭山市教育委員会、大井町教育委員会、騎西町教育委員会、富士見市教育委員会、嵐山町教育委員会

(順不同)

## 凡 例

1 遺跡におけるX・Yの座標表示は国家標準直角座標を示しており、本遺跡は第IX系内に位置し、それに基づく座標値を表記している。又、挿図における方位は全て座標北を示している。

2 本書に掲載した挿図内では遺構の名称を次のように表記した。

SS…**鑄造遺構群** SSK…**鑄造土壌** SJ…**住居跡** SB…**掘立柱建物跡**

SE…**井戸跡** SK…**土壌** SD…**溝跡** SC…**集石土壌** ST…**火葬墓**

3 本書に掲載した遺構図版の縮尺は以下のとおりである。

鑄造遺構・鑄造関連土壌 1/60・1/30、住居跡 1/60、カマド 1/30、掘立柱建物跡 1/60、井戸跡・土壌 1/80を原則としたが、例外的なものについてはスケールで指示した。

4 遺物の縮尺は以下のとおりである。

土器、炉壁、羽口、鑄型（鍋・容器・梵鐘） 1/4 鑄型（獸脚・仏像・仏具） 1/3

鉄製品、鉄塊 1/2 木製品 1/4を原則としたが、例外的なものはスケールで指示した。

5 遺構の遺物分布図におけるドットは遺物の出土位置および接合関係を示しナンバーは遺物実測図の挿図番号に対応している。また、住居跡・鑄造遺構のドットマークは以下のとおり。

住居跡……● 土師器・須恵器

鑄造遺構…● 鑄型 ○ 土器 □ 石・白色滓・木炭 ☆ 銅滓 ★ 鉄塊

△ 羽口 ▲ 鉄滓 ■ 炉壁 S 石 × その他

6 遺物実測図の表現は、調整技法の変換点を実線で、器形の変換点を破線で示した。須恵器は断面黒塗り、土師器は断面白抜き、灰釉陶器は断面網かけを施し、中世陶器は断面白抜きとした。図中の←は削りの方向を示した。

7 遺物観察表の胎土は、土器に含まれる鉱物を略号で示し、A赤色粒子、B角閃石、C白色粒子、D雲母、E片岩、F白色針状物質とした。焼成は、A良好、B普通、C不良の3ランクで表記した。残存率は%で示し、破片の場合は、図示した残存部位に対するもので全体の残存率を表示していない。備考に記載した番号は註記番号である。

8 鑄造遺物は、以下の分類項目を設定し遺構単位または小グリッドごとに分類・計量した。

鑄造遺物…鉄塊 1・2、炉壁 1・1'・2・3・4、銅滓 1・2、鉄滓 1・2・3・4・5・

大型滓・その他の滓、木炭（黒鉛化木炭を含む）、白色滓、石、鑄型、土器、羽口、粘土塊

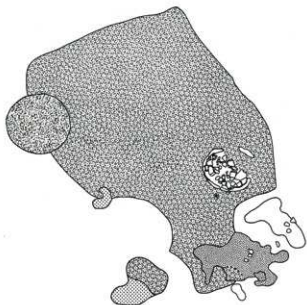
鑄 型…鍋、羽釜、梵鐘、容器、獸脚、他の脚、  
仏具、不明鑄型

9 巻頭写真15・16は、各遺構・グリッド出土の鑄造遺物である。緑色のカゴは鉄滓および銅滓、鉄塊、肌色のカゴは炉壁、水色のカゴは鑄型、黄色のカゴは羽口、土器、石、白色滓、木炭の順である。

鑄造遺物写真撮影の配置

緑 色		肌 色		黄 色	水 色
鉄滓 1	鉄滓 4	炉壁 1	羽 口 土 器		鑄 型
鉄滓 5	鉄滓 2	炉壁 2	石 白色滓 木 炭		鑄 型
大型滓	鉄滓 3				
銅 滓	鉄塊 1	鉄塊 2	炉壁 3	炉壁 4	鑄 型

[遺構]



-  炉壁
-  焼土
-  炭化物
-  粘土
-  滓
-  鋳型

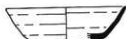
[遺物]

土師器



寛削り

須恵器



周辺寛削り  
回転糸切り

炉壁



断面

内面  
(溶解面)

外面  
(粘土面)

溶解物の付着

羽口



正面

推定径

内面  
(粘土面)



溶解物の付着

外面  
(溶解面)

鋳型



還元面範囲



仕上真土

中真土

荒真土

断面

金井遺跡B区遺構新旧対照表

〔鑄造遺構〕

新 番 号	旧 番 号	区	新 番 号	旧 番 号	区
SS01-SSK01		1	SS08-第3廃岸	第3廃岸	3
第1号鑄込み跡	1号炉		第4廃岸	第4廃岸	
第2号鑄込み跡	2号炉		第5廃岸	第5廃岸	
SS02-SSK01	SS-02 S K01		第6廃岸	第6廃岸	
SSK02	S K02		第7廃岸	第7廃岸	
SSK03	S K03	第8廃岸	第8廃岸		
SSK04	S K04	第9廃岸	第9廃岸		
SSK05	鑄型集中区	第10廃岸	第10廃岸		
第1号鑄込み跡	鑄型集中区	第11廃岸	第11廃岸		
第1号炉	1号炉	第12廃岸	第12廃岸		
第1廃岸	廃岸1	第13廃岸	第13廃岸		
第2廃岸	廃岸2	第14廃岸	第1鑄込み		
第3廃岸	廃岸3	第15廃岸	第2鑄込み		
SS03-SSK01	SS-03	第16廃岸	第4鑄込み		
SS04-SSK01	SS-04	第17廃岸	第5鑄込み		
SS05-SSK01	SS-05 S K01	第18廃岸	第6鑄込み		
SSK02	S K02	第19廃岸	第7鑄込み		
SSK03	S K03	第20廃岸	第8鑄込み		
SSK04	S K04	第21廃岸	第9鑄込み		
SSK05	S K05	炉体1号	第1炉壁		
SSK06	S K06	焼土塊集中区	焼土塊集中区		
SSK07	S K07	円形遺元状遺構	円形遺元状遺構		
SSK08	S K08	SS09-第1廃岸	SS-09 第1廃岸		
SSK09	S K09	第2廃岸	第2廃岸		
SSK10	S K10	SS10-SSK01	SS-10 S K01		
第1号鑄込み跡	第1鑄込み	SSK02	S K02		
第1号溶解炉	1号炉	SSK03	S K03		
第2号溶解炉	2号炉	SSK04	S K04		
第3号炉	3号炉	SSK05	S K05		
第1廃岸	第1廃岸	SSK06	S K06		
炉体1号	炉体1号	SSK07	S K07		
炉体2号	炉体2号	SSK08	S K08		
炉体3号	炉体3号	SSK09	S K10		
炉体4号	炉体4号	第1号鑄込み跡	第1鑄込み		
炉体5号	炉体5号	1号炉	1号炉		
SS06-SSK01	SS-06 S K01	第2号炉	2号炉		
SSK02	S K02	第3号炉	3号炉		
SSK03	S K03	第4号炉	4号炉		
SSK04	S K04	第1地点	第1地点		
SSK05	S K05	第2地点	第2地点		
SSK06	S K06	第3地点	第3地点		
SSK07	S K07	第4地点	第4地点		
SSK08	S K08	SS-11 S S K01	SS-11 S K01		
SSK09	S K09	SSK02	S K02		
SSK10	S K10	SSK03	S K03		
SSK11	S K11	SSK04	S K04		
SSK12	S K12	SSK05	S K05		
1号炉	第1鑄込み	SSK06	S K06		
SS07-SSK01	SS-07 S K01	SSK07	S K07		
1号炉	1号炉	第1号鑄込み跡	第1鑄込み		
第2号炉	2号炉	第2号鑄込み跡	第2鑄込み		
第3号炉	3号炉	第1号炉	1号炉		
第1廃岸	第2廃岸	SS12-SSK01	SS-12 S K01		
SS08-SSK01	SS-08 S K-03	SS13-第1廃岸	SS-13 第1地点		
SSK02	S K04	SS14-第1号鑄込み跡	SS-14 第1鑄込み		
SSK03	S K05	第1号炉	第1号炉		
SSK04	第1廃岸	第2号炉	第2号炉		
第1号炉	1号炉	SS15-SSK01	SS-15 S K01		
第2号炉	2号炉	第1廃岸	第1廃岸		
第1廃岸	第1廃岸	第2廃岸	第2廃岸		
第2廃岸	第2廃岸				

## 〔住居跡〕

新番号	旧番号	区
SJ-01	SJ-01	古 代
02	02	
03	03	
04	04	
05	05	
06	06	
07	07	
08	08	
09	09	
10	10	
11	11	
12	12	
13	14	
14	15	
15	16	
16	17	
17	18	
18	19	
19	20	
20	21	
21	22	
22	23	
23	24	
24	25	
25	26	
26	27	
27	28	
28	29	
29	30	
30	31	

## 〔堀立柱建物跡〕

新番号	旧番号	区
SB-01	SB-01	古 代
02	02	
03	03	
04	04	
05	05	
06	06	
07	07	
08	08	
09	09	
10	15	
11	11	
12	12	
13	13	
14	18	
15	10	
16	24	
17	25	
18	26	
19	17	
20	14	
21	20	
22	16	
23	19	
24	23	
25	21	
26	22	

## 〔溝跡〕

新番号	旧番号	区
SD-01	SD-01	1  2  3  4  5  6  7
02	02	
03	03	
04	04	
05	17	
06	22	
07	05	
08	06	
09	07	
10	08	
11	09	
12	10	
13	11	
14	12	
15	13	
16	14	
17	15	
18	18	
19	19	
20	20	
21	21	
22	37	
23	39	
24	56	
25	57	
26	38	
27	40	
28	41	
29	42	
30	43	
31	45	
32	49	
33	50	
34	51	
35	52	
36	53	
37	46	
38	47	
39	48	
40	54	
41	55	
42	26	
43	27	
44	28	
45	29	
46	30	
47	31	
48	32	
49	33	
50	23	
51	24	
52	25	
53	34	

## 〔井戸跡〕

新番号	旧番号	区
SE-01	SE-01	1  2  3  7
02	02	
03	08	
04	03	
05	04	
06	05	
07	06	
08	07	
09	11	
10	12	
11	13	
12	14	
13	15	
14	10	

## 〔火葬墓〕

新番号	旧番号	区
ST-01	ST-01	1  2  7
02	02	
03	05	
04	08	
05	09	
06	10	
07	11	
08	12	
09	SK-22	
10	03	
11	04	
12	14	
13	13	
14	15	
15	06	
16	07	



# 目 次

序  
例 言  
凡 例

## 【第1分冊】

I	発掘調査の概要	1
1	発掘調査に至る経過	1
2	発掘調査・報告書刊行事業の組織	2
3	発掘調査・報告書作成の経過	3
4	調査と整理の方法	4
II	立地と環境	7
1	立地	7
2	歴史的環境	9
3	入西遺跡群の概観	14
III	遺跡の概観	18
IV	古代の遺構と遺物	23
1	住居跡	23
2	掘立柱建物跡	91
V	中世の遺構と遺物	112
1	第1区の遺構と遺物	115
(1)	鋳造跡	117
(2)	掘立柱建物跡	136
(3)	溝跡	145
(4)	井戸跡	147
(5)	土墳	162
(6)	火葬墓	172
2	第2区の遺構と遺物	174
(1)	鋳造跡	176
(2)	鋳造関連遺構	191
(3)	掘立柱建物跡	196
(4)	溝跡	205
(5)	井戸跡	226
(6)	土墳	233
(7)	火葬墓	256

**【第2分冊】**

3 第3区の遺構と遺物	258
(1) 鋳造跡	260
(2) 掘立柱建物跡	434
(3) 溝跡	441
(4) 井戸跡	452
(5) 土墳	455
4 第4区の遺構と遺物	457
(1) 鋳造跡	457
(2) 溝跡	470
(3) 土墳	472
5 第5区の遺構と遺物	475
(1) 溝跡	475
(2) 土墳	478
6 第6区の遺構と遺物	482
(1) 溝跡	482
(2) 土墳	482
7 第7区の遺構と遺物	486
(1) 溝跡	486
(2) 井戸跡	489
(3) 土墳	489
(4) 火葬墓	491
8 第8区の遺構と遺物	492
(1) 土墳	492
VI その他の遺構と遺物	494
VII 参考資料	499

**【第3分冊】**

VIII 調査のまとめ	503
1 鋳造遺構と遺物	503
(1) 鋳造遺構について	503
(2) 鋳造遺物について	512
2 金井遺跡の鋳物師	581
3 中世の土器と遺構	596
4 古代の土器と遺構	611
附編	627

**【写真図版】**

# 挿 図 目 次

## (第1分冊)

第1図	未調査区の範囲	5	第49図	第13号住居跡カマド	58
第2図	グリッド配図	6	第50図	第13号住居跡貯蔵穴	59
第3図	地形断面模式図	7	第51図	第13号住居跡出土遺物(1)	60
第4図	金井遺跡B区地形図	8	第52図	第13号住居跡出土遺物(2)	61
第5図	埼玉県の地形図	9	第53図	第14号住居跡・カマド	62
第6図	金井遺跡A・B区と足洗遺跡	10	第54図	第14号住居跡出土遺物	63
第7図	金井遺跡B区と入西遺跡群	11・12	第55図	第15号住居跡・カマド	63
第8図	周辺遺跡の分布図	11・12	第56図	第16号住居跡出土遺物	64
第9図	金井遺跡B区全体図	21・22	第57図	第16号住居跡・カマド・貯蔵穴	65
第10図	古代の遺構全体図	23	第58図	第17号住居跡出土遺物	66
第11図	第1・2号住居跡	25	第59図	第17号住居跡・カマド	67
第12図	第1・2号住居跡カマド	26	第60図	第18号住居跡・カマド	68
第13図	第1・2・3号住居跡遺物分布図	27	第61図	第18号住居跡出土遺物	69
第14図	第1号住居跡出土遺物(1)	28	第62図	第19号住居跡	70
第15図	第1号住居跡出土遺物(2)	29	第63図	第19号住居跡出土遺物	70
第16図	第1号住居跡出土遺物(3)	29	第64図	第20号住居跡カマド	71
第17図	第2号住居跡出土遺物	30	第65図	第20号住居跡	72
第18図	第3号住居跡	31	第66図	第20号住居跡出土遺物(1)	73
第19図	第3号住居跡カマド	32	第67図	第20号住居跡出土遺物(2)	73
第20図	第3号住居跡出土遺物	32	第68図	第21号住居跡	74
第21図	第4号住居跡出土遺物(1)	33	第69図	第21号住居跡出土遺物	74
第22図	第4号住居跡出土遺物(2)	33	第70図	第22号住居跡	75
第23図	第4号住居跡・カマド	34	第71図	第22号住居跡カマド	76
第24図	第5号住居跡出土遺物	35	第72図	第22号住居跡出土遺物	77
第25図	第5号住居跡・カマド	36	第73図	第23号住居跡	78
第26図	第6号住居跡遺物分布図	37	第74図	第23号住居跡出土遺物	79
第27図	第6号住居跡・カマド	38	第75図	第24号住居跡出土遺物	79
第28図	第6号住居跡出土遺物	39	第76図	第24号住居跡	80
第29図	第7号住居跡・カマド・貯蔵穴	40	第77図	第25号住居跡カマド	81
第30図	第7号住居跡出土遺物	41	第78図	第25号住居跡	82
第31図	第8号住居跡	42	第79図	第25号住居跡出土遺物	83
第32図	第8号住居跡遺物分布図	43	第80図	第26号住居跡出土遺物	84
第33図	第8号住居跡出土遺物(1)	44	第81図	第26号住居跡・カマド	84
第34図	第8号住居跡出土遺物(2)	45	第82図	第27号住居跡	85
第35図	第8号住居跡出土遺物(3)	45	第83図	第28号住居跡出土遺物	86
第36図	第9号住居跡	46	第84図	第28号住居跡	86
第37図	第9号住居跡カマド・貯蔵穴	47	第85図	第29号住居跡	87
第38図	第9号住居跡出土遺物	48	第86図	第29号住居跡出土遺物	88
第39図	第10・12号住居跡	49	第87図	第30号住居跡	89
第40図	第10・12号住居跡カマド	50	第88図	第30号住居跡出土遺物	90
第41図	第10号住居跡出土遺物	50	第89図	第1号掘立柱建物跡(1)	92
第42図	第12号住居跡出土遺物	51	第90図	第1号掘立柱建物跡(2)	93
第43図	第161号土壌出土遺物(1)	52	第91図	第2号掘立柱建物跡	94
第44図	第161号土壌出土遺物(2)	52	第92図	第3号掘立柱建物跡	96
第45図	第11号住居跡カマド	53	第93図	第4号掘立柱建物跡	97
第46図	第11号住居跡・貯蔵穴	54	第94図	第5号掘立柱建物跡	98
第47図	第11号住居跡出土遺物	55	第95図	第6号掘立柱建物跡	100
第48図	第13号住居跡・遺物分布図	57	第96図	第7号掘立柱建物跡	101
			第97図	第8号掘立柱建物跡	102

第98図	第9号掘立柱建物跡	104	第149図	第1区土壇(3)	167
第99図	第10号掘立柱建物跡	105	第150図	第1区土壇(4)	168
第100図	第11号掘立柱建物跡	106	第151図	第1区土壇(5)	169
第101図	第12・13号掘立柱建物跡	107	第152図	第1区土壇出土遺物	170
第102図	第25号掘立柱建物跡	108	第153図	第1区火葬基	173
第103図	第26号掘立柱建物跡	109	第154図	第2区遺構配置図	175
第104図	掘立柱建物跡出土遺物	110	第155図	第2区遺構群全体図(1)	177・178
第105図	中世の遺構全体図	113・114	第156図	第2区遺構群全体図(2)	179
第106図	第1区遺構配置図	116	第157図	第2群第2号鋤造土壇	179
第107図	第1区鋤造遺構群全体図(1)	118	第158図	第2群第1・3号鋤造土壇	180
第108図	第1区鋤造遺構群全体図(2)	119	第159図	第2群第4・5号鋤造土壇	181
第109図	第1群第1号鋤込み跡	120	第160図	第2群第1号鋤込み跡(1)	182
第110図	第1群第1号鋤込み跡遺物出土状態	121	第161図	第2群第1号鋤込み跡(2)・第1号炉跡	183
第111図	第1群第2号鋤込み跡(1)	122	第162図	第2区鋤造遺構群出土遺物(1)	186
第112図	第1群第2号鋤込み跡(2)	123	第163図	第2区鋤造遺構群出土遺物(2)	187
第113図	第1群第2号鋤込み跡遺物出土状態	124	第164図	第2区鋤造遺構群出土遺物(3)	187
第114図	第1区鋤造遺構群遺物分布図	125	第165図	第2区鋤造遺構群出土遺物(4)	187
第115図	第1区鋤造遺構群出土遺物(1)	129	第166図	第3・4区鋤造遺構群	189
第116図	第1区鋤造遺構群出土遺物(2)	130	第167図	第1号粘土探掘跡(1)	192
第117図	第1区鋤造遺構群出土遺物(3)	131	第168図	第1号粘土探掘跡(2)	193
第118図	第1区鋤造遺構群出土遺物(4)	132	第169図	第2号粘土探掘跡	194
第119図	第1区鋤造遺構群出土遺物(5)	133	第170図	第3号粘土探掘跡	195
第120図	第1区鋤造遺構群出土遺物(6)	134	第171図	第1号炭焼き窯跡	195
第121図	第14号掘立柱建物跡	137	第172図	第19号掘立柱建物跡(1)	197
第122図	第15号掘立柱建物跡(1)	138	第173図	第19号掘立柱建物跡(2)	198
第123図	第15号掘立柱建物跡(2)	139	第174図	第19号掘立柱建物跡(3)	199
第124図	第16号掘立柱建物跡	140	第175図	第20号掘立柱建物跡	200
第125図	第17号掘立柱建物跡	141	第176図	第21号掘立柱建物跡	201
第126図	第18号掘立柱建物跡(1)	142	第177図	第2区溝跡・井戸跡・土壇配置図	202
第127図	第18号掘立柱建物跡(2)	143	第178図	第2区溝跡土層図(1)	203
第128図	第1区の溝・井戸・土壇配置図	144	第179図	第2区溝跡土層図(2)	204
第129図	第1区溝跡土層図	145	第180図	第7号溝跡出土遺物(1)	206
第130図	第1区溝跡出土遺物	146	第181図	第7号溝跡出土遺物(2)	207
第131図	第1号井戸跡・出土遺物(1)	148	第182図	第7号溝跡出土遺物(3)	208
第132図	第1号井戸跡出土遺物(2)	149	第183図	第7号溝跡出土遺物(4)	209
第133図	第1号井戸跡出土遺物(3)	150	第184図	第12号溝跡出土遺物	212
第134図	第2号井戸跡	151	第185図	第22号溝跡遺物分布図(1)	214
第135図	第2号井戸跡出土遺物	152	第186図	第22号溝跡遺物分布図(2)	215
第136図	第3号井戸跡・出土遺物(1)	153	第187図	第22号溝跡出土遺物(1)	216
第137図	第3号井戸跡出土遺物(2)	154	第188図	第22号溝跡出土遺物(2)	217
第138図	第3号井戸跡出土遺物(3)	155	第189図	第22号溝跡出土遺物(3)	218
第139図	第3号井戸跡出土遺物(4)	156	第190図	第22号溝跡出土遺物(4)	219
第140図	第3号井戸跡出土遺物(5)	157	第191図	第22号溝跡出土遺物(5)	220
第141図	第4号井戸跡	159	第192図	第22号溝跡出土遺物(6)	221
第142図	第4号井戸跡出土遺物(1)	160	第193図	第22号溝跡出土遺物(7)	222
第143図	第4号井戸跡出土遺物(2)	161	第194図	第22号溝跡出土遺物(8)	224
第144図	第4号井戸跡出土遺物(3)	162	第195図	第2区溝跡出土遺物	225
第145図	第1～6号土壇	163	第196図	第6・7号井戸跡	227
第146図	第7～10号土壇	164	第197図	第6号井戸跡出土遺物(1)	228
第147図	第1区土壇(1)	165	第198図	第6号井戸跡出土遺物(2)	229
第148図	第1区土壇(2)	166	第199図	第7号井戸跡出土遺物	230

第200图	第5·8·9号井戸跡	231
第201图	第8·9号井戸跡出土遺物	232
第202图	第85号土壌·鍛冶炉	233
第203图	土壌群全体図(1)	234
第204图	第86~89号土壌	235
第205图	第90·91号土壌	236
第206图	第92·93号土壌	238
第207图	土壌群全体図(2)	239
第208图	第94~99号土壌	240
第209图	土壌群全体図(3)	241
第210图	第101~104号土壌	242
第211图	第105~110号土壌	243
第212图	第111~116号土壌	244
第213图	第117·118号土壌	245
第214图	第2区土壌出土遺物(1)	247
第215图	第2区土壌出土遺物(2)	248
第216图	第2区土壌(1)	250
第217图	第2区土壌(2)	251
第218图	第2区土壌(3)	252
第219图	第2区土壌(4)	253
第220图	第2区火葬墓	256
(第2分冊)		
第221图	第3区遺構配置図	259
第222图	第5鑄造遺構群全体図(1)	260
第223图	第5鑄造遺構群全体図(2)	261
第224图	第5鑄造遺構群全体図(3)	262
第225图	第5群第1号溶解炉跡	264
第226图	第5群第2号溶解炉跡	265
第227图	第5群第3号炉·第1号鑄込み跡	266
第228图	第5群第1·2号土壌遺物分布図	268
第229图	第5群炉体1~4号遺物分布図	269
第230图	第5群炉体5号遺物分布図	270
第231图	第5群第10号鑄造土壌遺物分布図	271
第232图	第5鑄造遺構群出土遺物(1)	275
第233图	第5鑄造遺構群出土遺物(2)	276
第234图	第5鑄造遺構群出土遺物(3)	278
第235图	第5鑄造遺構群出土遺物(4)	279
第236图	第5鑄造遺構群出土遺物(5)	280
第237图	第5鑄造遺構群出土遺物(6)	282
第238图	第5鑄造遺構群出土遺物(7)	283
第239图	第5鑄造遺構群出土遺物(8)	284
第240图	第5鑄造遺構群出土遺物(9)	286
第241图	第5鑄造遺構群出土遺物(10)	288
第242图	第5鑄造遺構群出土遺物(11)	289
第243图	第5鑄造遺構群出土遺物(12)	290
第244图	第5鑄造遺構群出土遺物(13)	291
第245图	第5鑄造遺構群出土遺物(14)	292
第246图	第5鑄造遺構群出土遺物(15)	294
第247图	第5鑄造遺構群出土遺物(16)	295
第248图	第5鑄造遺構群出土遺物(17)	296
第249图	第5鑄造遺構群出土遺物(18)	297

第250图	第6鑄造遺構群全体図(1)	303
第251图	第6鑄造遺構群全体図(2)	304
第252图	第6群第1号炉跡	305
第253图	第6群第1·2·8号鑄造土壌遺物分布図	306
第254图	第6群第3~7号鑄造土壌遺物分布図	308
第255图	第6群第11·12号鑄造土壌	309
第256图	第6鑄造遺構群出土遺物(1)	313
第257图	第6鑄造遺構群出土遺物(2)	314
第258图	第6鑄造遺構群全体図	316
第259图	第7群第1号鑄造土壌	317
第260图	第7群第1~3号炉跡	318
第261图	第7鑄造遺構群出土遺物(1)	322
第262图	第7鑄造遺構群出土遺物(2)	323
第263图	第7鑄造遺構群出土遺物(3)	324
第264图	第7鑄造遺構群出土遺物(4)	326
第265图	第8鑄造遺構群全体図(1)	329
第266图	第8鑄造遺構群全体図(2)	330
第267图	第8群第1号鑄造土壌	332
第268图	第8群第2·3号鑄造土壌·円形還元状遺構	333
第269图	第8群第1号炉跡	334
第270图	第8群第1·2号炉跡	335
第271图	第8群炉体1号	335
第272图	第8群第2号炉跡·第8·9·15号廃滓	336
第273图	第8鑄造遺構群廃滓分布図(1)	337
第274图	第8群第11·12号廃滓	338
第275图	第8鑄造遺構群廃滓分布図(2)	339
第276图	第8群第1·2·6·11·12号廃滓	343
第277图	第8鑄造遺構群出土遺物(1)	344
第278图	第8鑄造遺構群出土遺物(2)	345
第279图	第8鑄造遺構群出土遺物(3)	346
第280图	第8鑄造遺構群出土遺物(4)	347
第281图	第8鑄造遺構群出土遺物(5)	347
第282图	第8鑄造遺構群出土遺物(6)	348
第283图	第8鑄造遺構群出土遺物(7)	349
第284图	第8鑄造遺構群出土遺物(8)	350
第285图	第8鑄造遺構群出土遺物(9)	351
第286图	第8鑄造遺構群出土遺物(10)	352
第287图	第8鑄造遺構群出土遺物(11)	353
第288图	第8鑄造遺構群出土遺物(12)	354
第289图	第9鑄造遺構群全体図	359
第290图	第9鑄造遺構群出土遺物(1)	362
第291图	第9鑄造遺構群出土遺物(2)	363
第292图	第9鑄造遺構群全体図	366
第293图	第10群第1·5鑄造土壌	368
第294图	第10群第5号鑄造土壌遺物分布図	369
第295图	第10群第2·6·8·9号鑄造土壌	370
第296图	第10群第3·4号鑄造土壌	371
第297图	第10群第7号鑄造土壌遺物分布図	372
第298图	第10群第1~3号炉·第1号鑄込み跡	373
第299图	第10群第4号炉跡	375
第300图	第10鑄造遺構群出土遺物(1)	379

第301図	第10鑄造遺構群出土遺物(2).....	380	第349図	第30号溝跡出土遺物(2).....	447
第302図	第10鑄造遺構群出土遺物(3).....	381	第350図	第30号溝跡出土遺物(3).....	448
第303図	第10鑄造遺構群出土遺物(4).....	382	第351図	第30号溝跡出土遺物(4).....	449
第304図	第10鑄造遺構群出土遺物(5).....	383	第352図	第30号溝跡出土遺物(5).....	450
第305図	第10鑄造遺構群出土遺物(6).....	384	第353図	第10・12・13号井戸跡・出土遺物.....	453
第306図	第10鑄造遺構群出土遺物(7).....	385	第354図	第11号井戸跡・出土遺物.....	454
第307図	第10鑄造遺構群出土遺物(8).....	386	第355図	第3区土壇出土遺物.....	455
第308図	第11鑄造遺構群全体図(1).....	392	第356図	第3区土壇.....	456
第309図	第11鑄造遺構群全体図(2).....	393	第357図	第4区遺構配置図.....	458
第310図	第11群第1号伊跡・第1・2号鑄造土壇.....	394	第358図	第14鑄造遺構群全体図.....	459
第311図	第11群第3・5～7号鑄造土壇.....	395	第359図	第14群第1号跡込み跡.....	460
第312図	第11群第1・2号跡込み跡・ 第4号鑄造土壇(1).....	396	第360図	第14群第1号伊跡.....	461
第313図	第11群第1・2号跡込み跡・ 第4号鑄造土壇(2).....	397	第361図	第14鑄造遺構群出土遺物(1).....	463
第314図	第11群第1・2号跡込み跡・ 第4号鑄造土壇(3).....	398	第362図	第14鑄造遺構群出土遺物(2).....	464
第315図	第11群遺物分布図.....	399	第363図	第14鑄造遺構群出土遺物(3).....	465
第316図	第11鑄造遺構群出土遺物(1).....	405	第364図	第15群第1号鑄造土壇.....	466
第317図	第11鑄造遺構群出土遺物(2).....	406	第365図	第15群第1・2号廃障.....	467
第318図	第11鑄造遺構群出土遺物(3).....	407	第366図	第15鑄造遺構群出土遺物.....	469
第319図	第11鑄造遺構群出土遺物(4).....	408	第367図	第4区溝跡土層図.....	470
第320図	第11鑄造遺構群出土遺物(5).....	409	第368図	第4区溝跡・土壇配置図.....	471
第321図	第11鑄造遺構群出土遺物(6).....	410	第369図	第4区土壇.....	472
第322図	第11鑄造遺構群出土遺物(7).....	411	第370図	第4区土壇出土遺物(1).....	473
第323図	第11鑄造遺構群出土遺物(8).....	412	第371図	第4区土壇出土遺物(2).....	474
第324図	第11鑄造遺構群出土遺物(9).....	413	第372図	第5区溝跡土層図.....	475
第325図	第11鑄造遺構群出土遺物(10).....	414	第373図	第5区溝跡・土壇配置図.....	476
第326図	第11鑄造遺構群出土遺物(11).....	415	第374図	第41号溝跡出土遺物.....	477
第327図	第11鑄造遺構群出土遺物(12).....	416	第375図	第5区土壇(1).....	478
第328図	第12群第1号鑄造土壇.....	421	第376図	第5区土壇(2).....	479
第329図	第12鑄造遺構群グリッド遺物分布図.....	421	第377図	第5区土壇(3).....	480
第330図	第12鑄造遺構群出土遺物(1).....	424	第378図	第6区溝跡・土壇配置図.....	482
第331図	第12鑄造遺構群出土遺物(2).....	425	第379図	第6区溝跡土層図.....	483
第332図	第13鑄造遺構群全体図.....	427	第380図	第6区土壇(1).....	484
第333図	第13鑄造遺構群遺物分布図.....	428	第381図	第6区土壇(2).....	485
第334図	第13鑄造遺構群出土遺物(1).....	431	第382図	第7区溝跡土層図.....	486
第335図	第13鑄造遺構群出土遺物(2).....	432	第383図	第7区溝跡・土壇配置図.....	487
第336図	第13鑄造遺構群出土遺物(3).....	433	第384図	第50・51号溝跡出土遺物.....	488
第337図	第22号掘立柱建物跡(1).....	435	第385図	第14号井戸跡出土遺物.....	489
第338図	第22号掘立柱建物跡(2).....	436	第386図	第14号井戸跡.....	489
第339図	第23号掘立柱建物跡(1).....	437	第387図	第7区土壇出土遺物.....	489
第340図	第23号掘立柱建物跡(2).....	438	第388図	第7区土壇(1).....	490
第341図	第24号掘立柱建物跡.....	439	第389図	第7区火葬基.....	491
第342図	第3区溝跡・井戸跡・土壇配置図.....	440	第390図	第8区土壇配置図.....	492
第343図	第3区溝跡土層図.....	441	第391図	第8区土壇.....	493
第344図	第27号溝跡遺物分布図.....	442	第392図	第8区土壇出土遺物.....	493
第345図	第26・27号溝跡出土遺物.....	442	第393図	第1・2号集石土壇.....	494
第346図	第30号溝跡遺物分布図.....	444	第394図	グリッド出土遺物(1).....	495
第347図	第30号溝跡.....	445	第395図	グリッド出土遺物(2).....	496
第348図	第30号溝跡出土遺物(1).....	446	第396図	グリッド出土遺物(3).....	497
			第397図	表探遺物(1).....	498
			第398図	表探遺物(2).....	498
			第399図	金井遺跡A区第160号土壇出土遺物(1).....	499

第400図	金井遺跡A区第160号土壌出土遺物(2)	500	第450図	梵鐘鑄型集成・乳	565
第401図	二反田遺跡出土溶解炉	501	第451図	容器鑄型	566
第402図	二反田遺跡出土遺物	502	第452図	容器鑄型集成(1)	567
(第3分冊)			第453図	容器鑄型集成(2)	568
第403図	梵鐘鑄造土壌	504	第454図	獸脚鑄型	569
第404図	フィゴ据え跡	505	第455図	獸脚鑄型集成(1)	570
第405図	鑄造土壌・堅穴状遺構	507	第456図	獸脚鑄型集成(2)	571
第406図	推定溶解炉	509	第457図	仏像鑄型集成	572
第407図	溶解炉出土部位復元図	510	第458図	弘貝鑄型	573
第408図	溶解炉集成	511	第459図	飾り金具鑄型集成	574
第409図	鉄塊系遺物(製品)	512	第460図	髹髹型集成	574
第410図	鑄造遺物総計	513・514	第461図	つまみ髹型集成	575
第411図	鑄造遺構群分割図	517	第462図	注ぎ口・鏡髹型集成	575
第412図	鉄塊系遺物(1)	518	第463図	猿貝北道跡出土遺物	576
第413図	鉄塊系遺物(2)	519	第464図	三叉状土製品使用法	576
第414図	鉄塊系遺物(3)	520	第465図	道具集成(1)	577
第415図	伊壁集成	521	第466図	道具集成(2)	578
第416図	炉壁(1)	522	第467図	道具集成(3)	579
第417図	炉壁(2)	523	第468図	道具集成(4)	580
第418図	炉壁(3)	524	第469図	全国鑄造・製鉄遺跡分布図(古代)	582
第419図	羽口集成	528	第470図	全国鑄造遺跡分布図(中世・近世)	583
第420図	羽口(1)	529	第471図	埼玉県内の製鉄・鑄造遺跡	584
第421図	羽口(2)	530	第472図	中世鑄物師の本質地	585
第422図	羽口(3)	531	第473図	遺跡周辺分布図	586
第423図	鍔(1)	533	第474図	第10群第7号鑄造土壌出土梵鐘復元図	587
第424図	鍔(2)	534	第475図	現存する中世の梵鐘	588
第425図	鍔(3)	535	第476図	梵鐘撞座集成	590
第426図	鉄滓(1)	537	第477図	花菱形文様	591
第427図	鉄滓(2)	538	第478図	見玉党分布図	592
第428図	鉄滓(3)	539	第479図	金井周辺小字名	593
第429図	黒鉛化木炭集成	540	第480図	見玉党の家紋とスタンプ状石製品	594
第430図	木炭(1)	541	第481図	土器接合関係図	597
第431図	木炭(2)	542	第482図	中世土器編年図(1)	599
第432図	木炭(3)	543	第483図	中世土器編年図(2)	601
第433図	白色滓(1)	545	第484図	在地鉢分類図	602
第434図	白色滓(2)	546	第485図	在地内耳鉢分類図	603
第435図	白色滓(3)	547	第486図	在地甕分類図	605
第436図	石(1)	549	第487図	中世第II期の集落(鑄造跡)	607
第437図	石(2)	550	第488図	鑄造遺構概念図	608
第438図	石(3)	551	第489図	中世第III期の集落	609
第439図	鑄型総計	552・553	第490図	古代の土器(第III期)	611
第440図	鑄型(1)	555	第491図	古代の土器(第IV期)	612
第441図	鑄型(2)	556	第492図	古代の土器(第V期)	613
第442図	鑄型(3)	557	第493図	古代の土器(第VI・VII期)	613
第443図	鍋・羽釜・容器・壺先髹型	558	第494図	古代の土器(第IX・X期)	614
第444図	各種髹型(1)	559	第495図	古代の土器(第XII・XIII・XIV期)	615
第445図	各種髹型(2)	560	第496図	古代集落変遷図(1)	617
第446図	梵鐘髹型	561	第497図	古代集落変遷図(2)	618
第447図	梵鐘髹型集成・撞座	562	第498図	古代集落変遷図(3)	619
第448図	梵鐘髹型集成・龍頭(1)	563	第499図	掘立柱建物跡の変遷(1)・(2)	620
第449図	梵鐘髹型集成・龍頭(2)	564	第500図	掘立柱建物跡の変遷(3)	621

# 表 目 次

## (第1分冊)

第1表	入西遺跡群一覽表	16
第2表	住居跡一覽表	90
第3表	掘立柱建物跡一覽表	111
第4表	第1 鈔造遺構群遺物計量表	126
第5表	第1 鈔造遺構群一覽表	135
第6表	第1 区掘立柱建物跡一覽表	143
第7表	第1 区溝跡一覽表	147
第8表	第1 区井戸跡一覽表	162
第9表	第1 区土壇一覽表	170
第10表	第1 区火葬墓一覽表	172
第11表	第2 鈔造遺構群遺物計量表(1)	184
第12表	第2 鈔造遺構群遺物計量表(2)	185
第13表	第3 鈔造遺構群遺物計量表	188
第14表	第4 鈔造遺構群遺物計量表	190
第15表	第2・3・4 鈔造遺構群一覽表	191
第16表	第2 区掘立柱建物跡一覽表	200
第17表	第2 区溝跡一覽表	225
第18表	第2 区井戸跡一覽表	232
第19表	第2 区土壇一覽表	254
第20表	第2 区火葬墓一覽表	256

## (第2分冊)

第21表	第5 鈔造遺構群遺物計量表(1)	272
第22表	第5 鈔造遺構群遺物計量表(2)	273
第23表	第5 鈔造遺構群一覽表	301
第24表	第6 鈔造遺構群遺物計量表(1)	311
第25表	第6 鈔造遺構群遺物計量表(2)	312
第26表	第6 鈔造遺構群一覽表	315
第27表	第7 鈔造遺構群遺物計量表(1)	320
第28表	第7 鈔造遺構群遺物計量表(2)	321
第29表	第7 鈔造遺構群一覽表	327
第30表	第8 鈔造遺構群遺物計量表(1)	340
第31表	第8 鈔造遺構群遺物計量表(2)	341
第32表	第8 鈔造遺構群一覽表	357
第33表	第9 鈔造遺構群遺物計量表(1)	360
第34表	第9 鈔造遺構群遺物計量表(2)	361
第35表	第9 鈔造遺構群一覽表	361
第36表	第10鈔造遺構群遺物計量表(1)	376
第37表	第10鈔造遺構群遺物計量表(2)	377
第38表	第10鈔造遺構群一覽表	390

第39表	第11鈔造遺構群遺物計量表(1)	402
第40表	第11鈔造遺構群遺物計量表(2)	403
第41表	第11鈔造遺構群一覽表	419
第42表	第12鈔造遺構群遺物計量表(1)	422
第43表	第12鈔造遺構群遺物計量表(2)	423
第44表	第12鈔造遺構群一覽表	425
第45表	第13鈔造遺構群遺物計量表(1)	429
第46表	第13鈔造遺構群遺物計量表(2)	430
第47表	第13鈔造遺構群一覽表	433
第48表	第3 区掘立柱建物跡一覽表	436
第49表	第3 区溝跡一覽表	452
第50表	第3 区井戸跡一覽表	455
第51表	第3 区土壇一覽表	455
第52表	第14鈔造遺構群遺物計量表	462
第53表	第15鈔造遺構群遺物計量表(1)	468
第54表	第15鈔造遺構群遺物計量表(2)	469
第55表	第14・15鈔造遺構群一覽表	470
第56表	第4 区溝跡一覽表	470
第57表	第4 区土壇一覽表	474
第58表	第5 区溝跡一覽表	477
第59表	第5 区土壇一覽表	481
第60表	第6 区溝跡一覽表	483
第61表	第6 区土壇一覽表	485
第62表	第7 区溝跡一覽表	488
第63表	第7 区井戸跡一覽表	489
第64表	第7 区土壇一覽表	491
第65表	第7 区火葬墓一覽表	491
第66表	第8 区土壇一覽表	492

## (第3分冊)

第67表	鉄塊系遺物分類表(1)	515
第68表	鉄塊系遺物分類表(2)	516
第69表	炉壁分類表	525
第70表	羽口推定口径(1)	527
第71表	羽口推定口径(2)	532
第72表	白色埴形状分類	544
第73表	埴玉類の中世梵鐘一覽	589
第74表	物部氏製作梵鐘一覽	591
第75表	児玉党家系図	594
第76表	三福寺出土遺物	595

# 付 図

付 図 金井遺跡B区全測図(1/400)



## 写 真 図 版

- |  |   |
|--|---|
| <p>図版1 金井遺跡B区全景</p> <p>図版2 西側調査区全景<br/>東側緩斜面全景</p> <p>図版3 第1・2号住居跡<br/>第3号住居跡<br/>第4号住居跡</p> <p>図版4 第4号住居跡<br/>第5号住居跡遺物出土状況<br/>第6号住居跡</p> <p>図版5 第7号住居跡<br/>第8号住居跡<br/>第8号住居跡遺物出土状況</p> <p>図版6 第8号住居跡遺物出土状況<br/>第8号住居跡カマド遺物出土状況<br/>第9号住居跡</p> <p>図版7 第10号住居跡<br/>第11号住居跡<br/>第11号住居跡カマド</p> <p>図版8 第13号住居跡<br/>第13号住居跡カマド<br/>第14号住居跡</p> <p>図版9 第16号住居跡<br/>第17号住居跡<br/>第17号住居跡カマド</p> <p>図版10 第17号住居跡カマド<br/>第18号住居跡<br/>第19号住居跡</p> <p>図版11 第19号住居跡遺物出土状況<br/>第20号住居跡<br/>第20号住居跡カマド</p> <p>図版12 第21号住居跡<br/>第22号住居跡<br/>第22号住居跡遺物出土状況</p> <p>図版13 第22号住居跡カマド<br/>第23号住居跡<br/>第23号住居跡遺物出土状況</p> <p>図版14 第24号住居跡<br/>第24号住居跡遺物出土状況<br/>第25号住居跡</p> <p>図版15 第27号住居跡<br/>第29号住居跡<br/>第30号住居跡</p> <p>図版16 第1号掘立柱建物跡<br/>第2・7～9号掘立柱建物跡<br/>第3号掘立柱建物跡</p> <p>図版17 第4・6・11号掘立柱建物跡<br/>第5号掘立柱建物跡<br/>第10号掘立柱建物跡</p> | <p>図版18 第12号掘立柱建物跡<br/>第13号掘立柱建物跡<br/>第14号掘立柱建物跡</p> <p>図版19 第15号掘立柱建物跡<br/>第19号掘立柱建物跡</p> <p>図版20 第20号掘立柱建物跡<br/>第21号掘立柱建物跡<br/>第22号掘立柱建物跡</p> <p>図版21 第23号掘立柱建物跡<br/>第24号掘立柱建物跡<br/>第25・26号掘立柱建物跡</p> <p>図版22 西側調査区<br/>第1銅造遺構群<br/>第1群第1号銅込み跡</p> <p>図版23 第1群第1号銅込み跡<br/>第1群第2号銅込み跡<br/>第1群第2号銅込み跡</p> <p>図版24 第2銅造遺構群<br/>第2群第2号銅造土塊確認状況<br/>第2群第5号銅造土塊</p> <p>図版25 第2群第1号銅込み跡<br/>第2銅造遺構群遺物出土状況1<br/>第2銅造遺構群遺物出土状況2</p> <p>図版26 第2銅造遺構群古銭出土状況<br/>第3銅造遺構群<br/>第3銅造遺構群</p> <p>図版27 第4銅造遺構群缸岸出土状況<br/>第4銅造遺構群</p> <p>図版28 第5銅造遺構群粘土貼床<br/>第5銅造遺構群<br/>第5銅造遺構群</p> <p>図版29 第5群第1～8号銅造土塊<br/>第5群第1号銅造土塊</p> <p>図版30 第5群第1号銅造土塊梵鐘型出土状況<br/>第5群第2号銅造土塊遺物出土状況<br/>第5群第9号銅造土塊</p> <p>図版31 第5群第1号溶解炉<br/>第5群第1号溶解炉断面<br/>第5群第2号溶解炉</p> <p>図版32 第5群第2号溶解炉<br/>第5群第1号銅込み跡<br/>第5群炉体5号炉壁出土状況</p> <p>図版33 第5群炉体5号トリエ出土状況<br/>第6銅造遺構群遺物出土状況<br/>第6群第3号銅造土塊</p> <p>図版34 第6群第4号銅造土塊<br/>第6群第6号銅造土塊</p> |
|--|---|

- 第6群第1号炉跡  
 図版35 第7群第1号鈣造土塊  
 第7群第1号鈣造土塊遺物出土状況  
 第7群第3号炉跡  
 図版36 第8鈣造遺構群確認状況  
 第8鈣造遺構群確認状況  
 第8鈣造遺構群  
 図版37 第8群第3号鈣造土塊  
 第8群第1号鈣造土塊  
 第8群第1号炉跡  
 図版38 第8群第2号炉跡  
 第8群円形還元状遺構  
 第8群第2号虎洋  
 図版39 第8群第7号虎洋  
 第9群第1号虎洋  
 第9群第2号虎洋  
 図版40 第10鈣造遺構群  
 第10群第1・5号鈣造土塊  
 第10群第1号鈣造土塊  
 図版41 第10群第1号鈣造土塊  
 第10群第1号鈣造土塊金類出土状況  
 第10群第1号鈣造土塊梵鐘鋳型出土状況  
 図版42 第10群第2号鈣造土塊  
 第10群第3号鈣造土塊  
 第10群第5号鈣造土塊  
 図版43 第10群第5号鈣造土塊  
 第10群第7号鈣造土塊  
 第10群第7号鈣造土塊梵鐘鋳型出土状況  
 図版44 第10群第7号鈣造土塊梵鐘鋳型出土状況  
 第10群第1号炉跡粘土貼床  
 第10群第1号炉跡粘土貼床  
 図版45 第10群第2・3号炉跡  
 第10群第1号鈣込み跡鋳型出土状況  
 調査区東側緩斜面  
 図版46 第11鈣造遺構群  
 第11群第2号鈣造土塊  
 第11群第2号鈣造土塊遺物出土状況  
 図版47 第11群第3号鈣造土塊  
 第11群第4号鈣造土塊・第1・2号鈣込み跡  
 第11群第4号鈣造土塊  
 図版48 第11群第2号鈣込み跡・第4号鈣造土塊・  
 第10号井戸跡  
 第11群第2号鈣込み跡  
 第11群ビット7鋳型出土状況  
 図版49 第11群P-14グリッド仏像鋳型出土状況  
 第11群P-13-hグリッド仏像鋳型出土状況  
 第12群第1号鈣造土塊  
 図版50 第13群第1号虎洋  
 第14鈣造遺構群  
 第14鈣造遺構群  
 図版51 第14鈣造遺構群  
 第14群第1号鈣込み跡  
 第14群第1号鈣込み跡  
 図版52 第14群第1号鈣込み跡  
 第15群第1号鈣造土塊  
 第15群第2号虎洋  
 図版53 第85号土塊  
 第1号炭焼き窯跡  
 第2区土塊群1  
 図版54 第2区土塊群2  
 第2区土塊群3  
 第1号土塊  
 図版55 第4号土塊  
 第89号土塊  
 第90号土塊  
 図版56 第90号土塊断面  
 第91号土塊  
 第92号土塊遺物出土状況  
 図版57 第117号土塊  
 第117号土塊鋳型出土状況  
 第118号土塊  
 図版58 第161号土塊  
 第174号土塊羽口出土状況  
 第183号土塊遺物出土状況  
 図版59 第1号井戸跡  
 第1号井戸跡木杭出土状況  
 第1号井戸跡木杭出土状況  
 図版60 第2号井戸跡  
 第3号井戸跡  
 第3号井戸跡椀出土状況  
 図版61 第3号井戸跡曲物出土状況  
 第3号井戸跡板碑出土状況  
 第4号井戸跡  
 図版62 第4号井戸跡井戸枠出土状況1  
 第4号井戸跡井戸枠出土状況2  
 第4号井戸跡井戸枠出土状況3  
 図版63 第4号井戸跡井戸枠出土状況4  
 第5号井戸跡  
 第6号井戸跡  
 図版64 第7号井戸跡  
 第8号井戸跡  
 第9号井戸跡  
 図版65 第10号井戸跡  
 第11号井戸跡木製品出土状況  
 第12号井戸跡  
 図版66 第13号井戸跡  
 第14号井戸跡  
 第7号溝跡  
 図版67 第7号溝跡遺物出土状況  
 第7号溝跡遺物出土状況

- 第22号溝跡遺物出土状況  
 図版68 第22号溝跡遺物出土状況  
 第22号溝跡遺物出土状況  
 第22号溝跡獸脚鍔型出土状況  
 図版69 第30号溝跡 1  
 第30号溝跡 2  
 第30号溝跡型出土状況  
 図版70 第30号溝跡・第174号土壇  
 第30号溝跡 3  
 第50号溝跡  
 図版71 第1号粘土探掘跡  
 第1号粘土探掘跡  
 第2号粘土探掘跡  
 第2号粘土探掘跡  
 第3号粘土探掘跡  
 第3号粘土探掘跡  
 図版72 第1号集石土壇  
 第1号火葬墓  
 第5号火葬墓  
 第8号火葬墓  
 第2号集石土壇  
 第4号火葬墓  
 第8号火葬墓確認状況  
 第13号火葬墓  
 図版73 住居跡出土遺物 1  
 図版74 住居跡出土遺物 2  
 図版75 住居跡出土遺物 3  
 図版76 住居跡出土遺物 4  
 図版77 住居跡・井戸跡出土遺物  
 図版78 土器・石器  
 図版79 木器椀・曲物  
 図版80 白磁・青磁椀  
 図版81 青磁椀  
 図版82 青磁椀・常滑甕  
 図版83 常滑片口鉢  
 図版84 常滑片口鉢  
 図版85 瀬戸四耳壺・鉢・備前撰鉢・志野  
 図版86 瀬戸皿・鉢・盤  
 図版87 瀬戸椀  
 図版88 瀧美・瀬戸壺・在地土師質皿  
 図版89 在地壺・在地内耳鍋  
 図版90 在地片口鉢  
 図版91 伊壁  
 図版92 伊壁  
 図版93 伊壁  
 図版94 伊壁  
 図版95 伊壁：クライ・羽口・ノミ口  
 図版96 羽口  
 図版97 鍋・容器・掬先・鏡・つまみ・注ぎ口鍔型  
 図版98 三叉状土製品・半球状土製品・木製品  
 図版99 仏像鍔型  
 図版100 梵鐘鍔型（陽鍔文字）・獸脚鍔型  
 図版101 獸脚鍔型  
 図版102 獸脚鍔型  
 図版103 容器・獸脚鍔型・猫足鍔型  
 図版104 飾り金具鍔型  
 図版105 三叉状土製品  
 図版106 三叉状土製品・磁石  
 図版107 トリベ・鍛冶羽口・道具・紡錘車・土鍾  
 図版108 銅塊・銅滓  
 図版109 鉄塊系遺物  
 図版110 ハタまわし（X線写真）  
 図版111 鉄塊系遺物（X線写真）  
 図版112 鉄製壺（X線写真）  
 鉄塊系遺物（X線CT写真）  
 図版113 鑄造関連分析資料 1・2  
 図版114 鑄造関連分析資料 3・4  
 図版115 自然化学分析（炭化材）  
 図版116～143 顕微鏡組織  
 図版136～145 CMA  
 図版146～153 顕微鏡組織  
 図版154～161 CMA

# I 発掘調査の概要

## 1 発掘調査に至る経過

首都圏における人口増加の波は著しく、全国の三分の一の人口が集中している。埼玉県ではそれに対応するため、住宅・都市整備公団を中心に住宅政策及び地域環境整備計画が進められている。坂戸市入西（西部）地区については、住宅・都市整備公団による区画整理方式により宅地開発事業が計画された。

住宅・都市整備公団では文化庁との間で取り交わされた『住宅・都市整備公団の事業施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取り扱いに関する覚書』に基づき、埼玉県教育委員会へ「坂戸市入西（西部）地区における埋蔵文化財の取り扱いについて」照会した。

県教育委員会では埋蔵文化財遺跡地名表等に基づき、昭和56年1月20日付け教文第918号をもって次のとおり回答した。

### 記

#### 1 文化財の所在

名 称	所 在 地	種 別	時 期
坂戸市 No.99 柘塚古墳	坂戸市大字掘込 字桑原157	古 墳	古墳時代後期

上記の他に条里遺跡及び畑地部分に集落遺跡の存在が予想される。

#### 2 取り扱いについて

- (1) 開発予定地内は事前の遺跡分布調査及び必要に応じて試掘調査を実施して、遺跡の所在を確認する必要がある。
- (2) 上記の結果をもとに埋蔵文化財ができるだけ現状保存できる開発計画を策定することが望ましい。
- (3) 計画上、やむを得ず現状変更する場合は、文化財保護法第57条3の規定により、事前に文化庁長官あて埋蔵文化財発掘通知を提出して、記録保存のための発掘調査を実施すること。

住宅・都市整備公団と県教育委員会では開発地域内に所在する遺跡の取り扱いについて協議を重ねた結果、財団法人埼玉埋蔵文化財調査事業団に委託して昭和59年度から発掘調査を実施することに決定した。

文化財保護法に基づき、住宅・都市整備公団からは埋蔵文化財発掘通知、財団法人埼玉埋蔵文化財調査事業団からは埋蔵文化財発掘調査届が文化庁長官へ提出され、金井遺跡B区の発掘調査は平成元年4月1日から平成2年9月30日まで実施された。

(文化財保護課)

## 2 発掘調査・報告書刊行事業の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

### (1)発掘調査（平成元年度）

	理事長	荒井 修二
	副理事長	百瀬 陽二
	常務理事兼 管理部長	古市 芳之
	理事兼調査 研究部長	吉川 國男
管理部	管理課長	関野 栄一
	主 事	江田 和美
	主 事	岡野美智子
	主 事	本庄 朗人
	主 事	斎藤 勝秀
調査研究部	副部長	塩野 博
	第二課長	昼間 孝次
	主任調査員	杉崎 茂樹
	主任調査員	富田 和夫
	主任調査員	馬橋 泰雄
	調査員	石塚 和則
	調査員	赤熊 浩一
	調査員	宮瀧 交二

### 発掘調査（平成2年度）

	理事長	荒井 修二
	副理事長	早川 智明
	常務理事兼 管理部長	古市 芳之
	理事兼 調査部長	吉川 國男
管理部	庶務課長	高田 弘義
	主 査	松本 晋
	主 事	岡野美智子
	経理課長	関野 栄一
	主 任	江田 和美
	主 事	本庄 朗人
	主 事	斎藤 勝秀
調査部	副部長	塩野 博
	第二課長	昼間 孝次
	主任調査員	杉崎 茂樹
	主任調査員	馬橋 泰雄
	主任調査員	赤熊 浩一
	調査員	佐藤 康二

### (2)整理事業（平成4年度）

	理事長	荒井 修二
	副理事長	早川 智明
	常務理事兼 管理部長	倉持 悦夫
	理事兼 調査部長	栗原 文蔵
管理部	庶務課長	萩原 和夫
	主 査	賛田 清
	主 事	菊池 久
	経理課長	関野 栄一
	主 任	江田 和美
	主 事	長滝美智子
	主 事	福田 昭美
	主 事	腰塚 雄二
資料部	部長	中島 利治
	副部長兼 資料整理第一課長	増田 逸朗
	主任調査員	赤熊 浩一

### 整理事業（平成5年度）

	理事長	荒井 桂
	副理事長	富田 真也
	専務理事	横川 好富
	常務理事兼 管理部長	柴崎 光生
	理事兼 調査部長	中島 利治
管理部	庶務課長	萩原 和夫
	主 任	賛田 清
	主 事	菊池 久
	経理課長	関野 栄一
	主 任	江田 和美
	主 事	長滝美智子
	主 事	福田 昭美
	主 事	腰塚 雄二
資料部	部長	小川 良祐
	副部長兼 資料整理第一課長	谷井 彪
	主任調査員	赤熊 浩一

### 3 発掘調査・報告書作成の経過

金井遺跡B区は、平成元年4月から平成2年9月まで発掘調査を実施した。調査当初は、足洗遺跡の一部として確認されていたが、鑄造遺跡であることが明らかとなり、小字名が「金井」であることから、鑄造遺構の認められる20000㎡について金井遺跡B区とした。既に、本調査区の北側を、金井遺跡として昭和60年4月から昭和61年3月に当事業団で発掘調査を実施しており、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第86集の整理報告書が刊行されている。よって、昭和60年度に調査し報告された遺跡範囲をA区とし、本報告書は平成元年度以降に調査した中世の鑄造遺構を中心とした範囲であり、B区と呼称して報告するものである。

平成元年度 4月、足洗遺跡の発掘調査として開始する。調査準備として、遺跡周囲の東側低地部分に幅2mのトレンチを入れ遺構のないことを確認して廃土置き場と仮設事務所を建てた。また、遺跡周囲に外柵と南側には防塵対策としてネットを施した。中旬、重機による表土除去を開始し、遺構確認作業に着手する。その結果、かなり遺構密度の高いことを確認した。5月、古代の竪穴住居跡から調査に取り掛かる。9月、足洗遺跡の調査に目処を付け、西側の台地上の鑄造遺構の確認された地区へ、調査の主体を移す（金井遺跡B区と呼称した範囲）。中旬、調査区西側の大規模な第1号井戸跡から始めたが、確認面

で直径5m、深さは5mを越え、手掘りで進めたものの完掘まで1か月に及んだ。10月、第1号住居跡・第1号土壇・第1号溝を発掘。11月、第1号鑄造遺構に着手。主軸方向に合わせて1mメッシュを組み、遺構内から鍋鑄型を検出した。また、第5鑄造遺構群の確認面で梵鐘鑄型の椀座部分を採取し、これらのことから、中世の鑄造遺構であることが判明した。3月までに竪穴住居跡21軒、掘立柱建物跡20棟、井戸跡10基、土壇151基、鑄造遺構群7地点を調査した。

平成2年度 4月、先年度に引き続き、鑄造遺構を中心に調査を進めた。第5鑄造遺構群では、溶解炉を確認でき、また、梵鐘鑄造土壇群から数多くの梵鐘鑄型を検出した。6月、全国的に見ても貴重な遺跡であると判断し、報道各社に遺跡内容を公表し、併せて、一般への遺跡見学会を実施した。



溶解炉の取上げ作業

7月、東側緩斜面の廃堆地積層を1mグリッドごとに遺構確認面まで掘り下げ、第9～13遺造遺構群を確認した。ここでは、仏像・仏具・獣脚鋳型を多く検出した。8月、検出した第2号溶解炉の調査を終え炉底部分だけではあつたが残りが良いため切り取りによる保存を実施した。9月、調査区北側の第14・15遺造遺構群や土塙墓群の調査を進めた。また、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡の調査も進め、下旬に、航空写真撮影と地形・遺構測量を実施し、調査を終了した。

10月、本遺跡から検出された遺構は極めて特殊な中世の鋳造跡であり、日本においてこれほどの規模でなおかつ良好な状態で残されていたのは貴重である。そこで、住宅・都市整備公団、埼玉県教育局文化財保護課による協議の結果、梵鐘鋳造土塙をはじめとする主要遺構（第5・8・10・14遺造遺構群）について保護措置をとることとなり、調査終了後、遺構にシートを敷いて砂で埋め戻した。土地区画整理事業の終了後本地区は地元へ畑として換地され将来的にも本地区に鋳造遺構が残されることを目的とした。今後、本地区の取り扱いに付いては慎重に行うこととなった。

なお、金井遺跡の未調査部分（墓地部分）については、別途協議することとなっている。墓地の周辺からは鋳造遺構の密度が濃く南側には第2遺造遺構群を検出、東側からは大型の獣脚鋳型（巻頭図版12の上）が検出されており、墓地部分に仏具生産の中心的な鋳造遺構が遺存していると考えられる。

平成4年度 4月、金井遺跡B区の整理に着手。古代の住居跡・掘立柱建物跡の遺物接合・図面整理及び、実測作業から始める。7月、いよいよ、鋳造遺物の分類・計量作業に取りかかる。第1遺造遺構群から順次進め、同時に、遺構単位の遺物分類写真撮影を行った。全量採取した遺物はテンパコに500箱、これを、12月までに終了。1月、土器・鋳造遺物の実測、トレース、各遺構図の作成作業を進めた。

平成5年度 4月、木器・鋳造遺物の実測、トレース、各遺構図の仮版組・トレースを行い、7月、併行して鋳造遺物の観察表および分布図を作成した。9月から11月、遺構・遺物版組と遺構原稿の執筆を行い、鋳造遺物の組成グラフを作成した。12月から2月、遺物写真撮影と鋳造遺物の原稿執筆を行い、3月、割付けと編集作業を行った。

平成6年度 報告書の印刷・製本を行った。

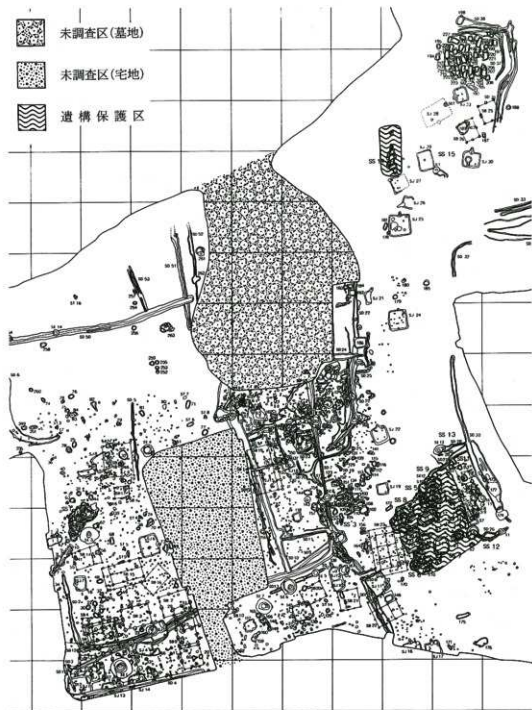


鋳造遺構に砂を入れて保護する

## 4 調査と整理の方法

### (1) 調査法の選択

金井遺跡B区は奈良・平安時代の集落と中世の鋳造及び集落の複合遺跡である。特に、鋳造遺構



第1図 未調査区の範囲

については日本において調査例が少なく、出土遺物の全様も解明されていない。このため、本遺跡の調査は遺物の性格や個々の遺構の性格を解明するため検出された遺物（鉄塊、炉壁、銅滓、鉄滓、木炭、白色滓、石、鋳型、土器、羽口等）は全て採取することを選択した。

## (2) グリッドの設定

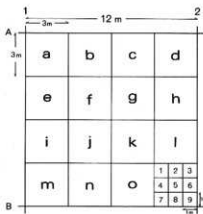


本遺跡は2万㎡におよび、隣接する金井遺跡A区や足洗遺跡と共通の12mを1単位とする大グリッドを設定し、北から南にABC、西から東に1, 2, 3と付した。更に、その中を3mを単位とする中グリッドを設定し、a～pと付した。しかし、鑄造遺構および鑄造遺物を取り上げて扱うには大きすぎると判断し1mの小グリッドを設定し、1～9を付した。グリッドの呼称は北西隅で表現することとした。

- 大グリッド：A-1 遺跡の基本単位  
 中グリッド：A-1-a 遺構・遺物処理の中単位  
 小グリッド：A-1-a-1 遺構・遺物処理の基本単位

### (3) 鑄造単位と遺構名称

調査範囲全体に鑄造遺構が広く分布して検出された。このため遺構確認時点において鑄造遺構のまとまりが見られるもの、そして、立地状況や検出遺物の様子、更には、堆積層の色調等を観察し、鑄造遺構のまとまりを「群」として捉え、それぞれを第1～15鑄造遺構群(略称SS)として呼称した。その中で、検出された遺構は性格や機能によって鑄造土壌(SSK)、鑄込み跡、廃滓、溶解炉、炉、炉体等の遺構名をつけ群単位で第1号から番号をつけた。しかし、粘土探掘跡、炭焼き窯跡、土壌、井戸跡、溝跡は遺跡全体の通し番号とした。



第2図 グリッド配置図

### (4) 遺物の取り上げ方法

鑄造遺物は全て取り上げ、方法は基本的の1mの小グリッドである。しかし、平面で遺構が捉えられた場合は遺構名を付けて取り上げ、堆積層中でも鑄造遺物の集中が認められると廃滓や炉体等の呼称を付けて取り上げた。この場合でも1mの小グリッドが基本である。

### (5) 整理の方法

本遺跡出土の鑄造遺物は全て分類し計量を行った。その際、分類基準は現段階で考えられる鑄造遺物の機能と性格から、鉄塊、炉壁、銅滓、鉄滓、木炭、白色滓、石、鋳型、土器、羽口、粘土塊の11分類を設定し、さらに、その中でも形態や質感・色調・重さ等で鉄塊1・2、炉壁1・1'・2・3・4、銅滓1・2、鉄滓1・2・3・4・5・大型滓・その他の滓に細分類した。また、鋳型は鍋・羽釜・容器・梵鐘・駄脚・他の脚・仏具・不明鋳型の分類項目を設定した(詳細はⅦ-5の「鑄造遺物について」参照)。これらの分類基準に従って、小グリッドまたは遺構単位に処理し、水切りかごに遺物を分けて置き記録写真を撮影した。その後、計量データは統計処理し1mメッシュの分布図を作成。また、鑄造遺構群ごとに統計処理し、各遺構の性格を理解する基礎資料とした。本報告には紙面の都合で中グリッドの計量表のみ掲載したが、発掘調査から一貫して基本とした小グリッドのデータは分布図に反映させた。

## II 立地と環境

### 1 立地

金井遺跡は埼玉県坂戸市大字新堀「字金井」に所在する。「字金井」の範囲は昭和60年度に調査した金井遺跡(A区)及び本調査範囲のB区と調査区域外のB区西側に広がる畑地部分である。また、西端には県指定の天然記念物「ステコビル」の生息する金山神社が存在している。

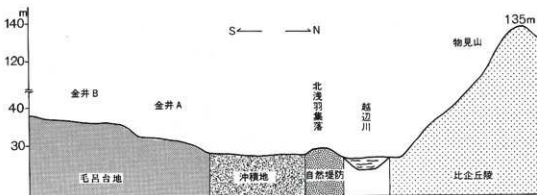
位置は東武東上線北坂戸駅から西へ約2km、越辺川と高麗川の挟まれた毛呂台地の北東先端にあたる。本地域は東京の都心から北西に約50km離れ、東京のベッドタウンとして位置づけられる。遺跡のすぐ東には東京と新潟を結ぶ関越自動車道が走り、高坂サービスエリアから南西に1.5km、鶴ヶ島I、Cから北西に2.5kmの位置にある。

行政上は、現在坂戸市に属するが、市制施行前は入間郡入西村であり、市町村制の施行以前は入西郡新堀村に属していた。現在の坂戸市の中では市の西部にあたり市街の中心から西に2.5km離れたところにある。

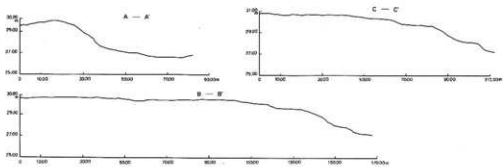
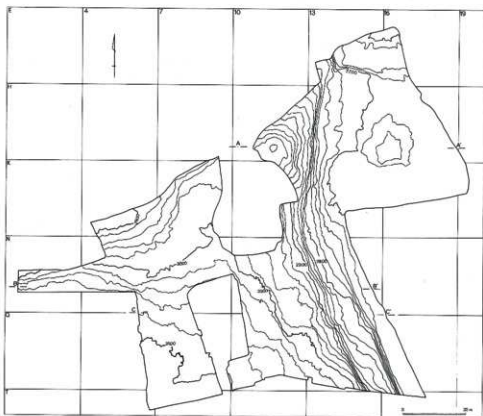
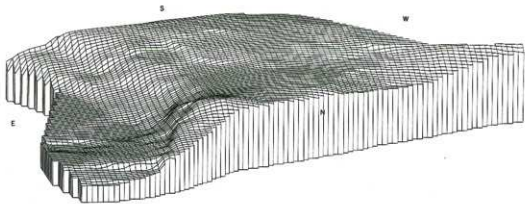
遺跡は、地形的に見ると広大に続く関東平野と秩父山地から東に伸びる毛呂台地との接点にあたり、越辺川を臨む毛呂台地の北東先端に立地し、台地上から東側の緩斜面にかけて広がりをもつ。標高は台地上で32m、緩斜面との比高差は約3mである。

北側には、この越辺川によって開析された沖積地が広がり肥沃な水田地帯を形成している。南側には高麗川が流路をとり遺跡東側にあたる上吉田の集落付近で越辺川と合流し、その流れは入間川へとそそぐ。この毛呂台地は越辺川と高麗川に挟まれた東西に細長く伸び、南北2.5km、東西5.0kmのやせた台地である。台地内には両河川を始めこの支流である葛川等の中小河川の侵食を受け、起伏に富んだ複雑な地形をしている。越辺川の北側には比企丘陵が眼前に對峙し視界を遮る。また、高麗川の東側には、毛呂台地と対照的な比較的平坦な扇状地地形の坂戸台地が広がる。

毛呂台地と坂戸台地を取り巻く広大な沖積地は、越辺川や高麗川によって形成され、入西条里に代表される肥沃な水田地帯として存在し、原始・古代から中世の入西遺跡群を支えてきた大きな要因と言える。



第3図 地形断面模式図



第4图 金井道跡B区地形图

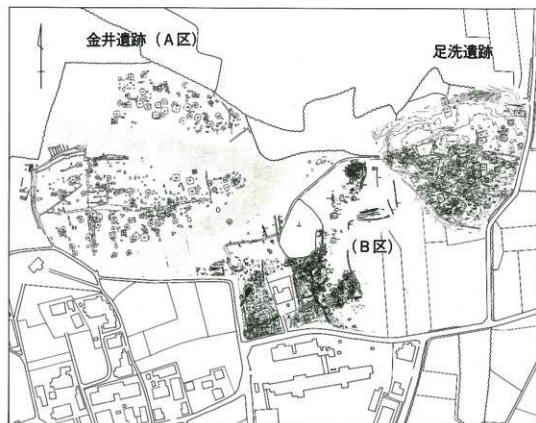


れるとし、量的には15世紀代の遺物が多いとしている。塚の越遺跡からは井戸跡、溝跡、火葬墓、土壌を検出した。『塚の越遺跡』（昼間1991）によれば火葬墓内から青銅製の五銚杵を検出した。また、遺跡内から青銅製の神像を検出し、いずれも室町時代と見られる。第9号溝からは高台の付く常滑産の片口鉢、青磁碗、さらに、土釜や在地産の片口鉢を検出しており13世紀後半から15世紀代の遺跡と考えられる。これらの遺跡群の北側には入西耕地（入西条里）が広がる。

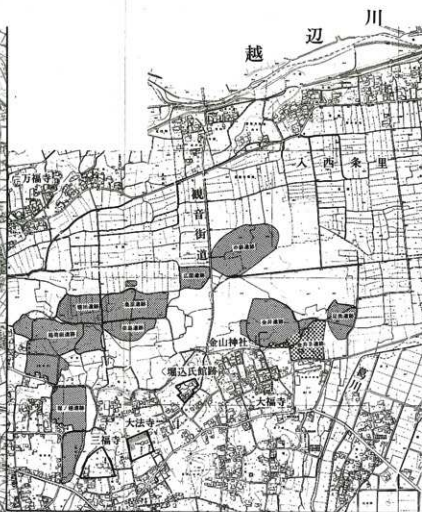
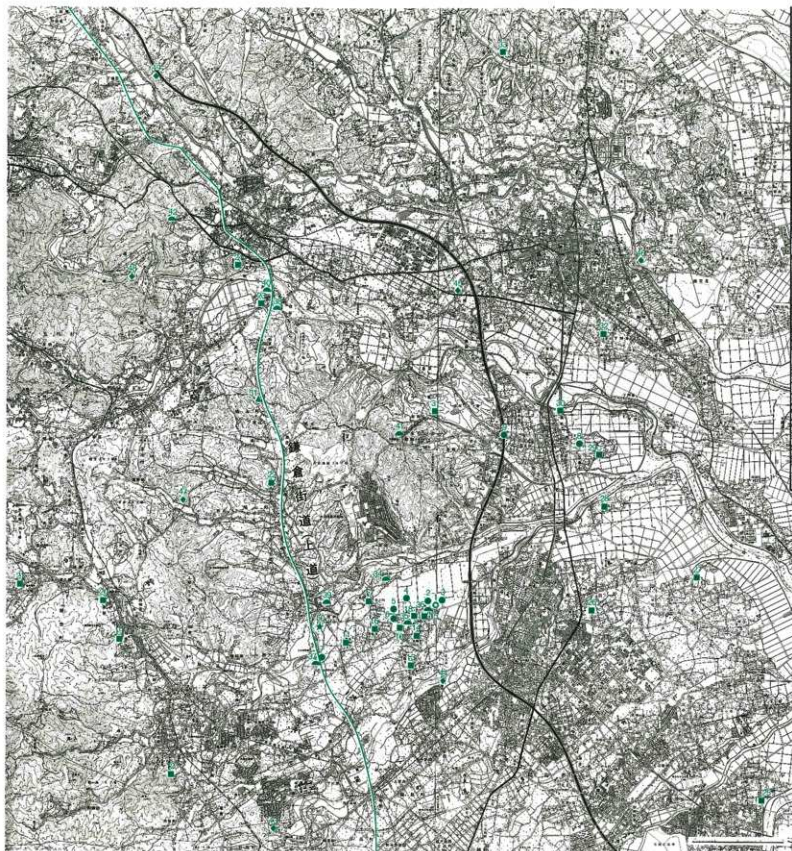
このように、入西遺跡群は中世13世紀から15世紀、そして、16・17世紀に至るまでの足跡が見られるが、中でも金井遺跡B区で鋳造生産を行っていた13世紀後半～14世紀前半と集落として存在する14世紀後半～15世紀代が遺跡の中心的な時代と見られる。

入西遺跡群の所在する入西郡は武蔵七党の一つ見玉党の祖、見玉有太夫弘行の所領であった。弘行の本領は見玉郡にあり、長子家行は見玉一族の本流として見玉郡を中心とし上野国にも所領が及んだ。三男資行は父祖伝来の地、越辺川流域の入西郡を分け与えられ入西氏を名乗った。資行の居館がどこであったかは伝承もなく不明であるが、11世紀も終わりに近い頃と考えられている。（『坂戸市史』通史編1）。

入西資行の嫡流は浅羽氏を、二男は小代氏、三男は越生氏となり領地を分割譲渡していく。やがて、浅羽氏は小見野・粟生田・大河原・長岡・堀込氏と分割し、小代氏は高坂・吉田氏、越生氏は成瀬・黒岩・岡崎と分割する。入西遺跡群の確認された13～14世紀にはほぼこうした所領分割の行



第6図 金井遺跡A・B区と足洗遺跡



第7図 金井遺跡B区と入西遺跡群

- |          |          |          |
|----------|----------|----------|
| 1 金井遺跡B区 | 18堀込氏館   | 35大法寺    |
| 2 金井遺跡A区 | 19越生氏館   | 36大福寺    |
| 3 足洗遺跡   | 20黒岩氏館   | 37崇徳寺    |
| 4 桑原遺跡   | 21児玉雲太夫館 | 38源義賢墓   |
| 5 稲荷前遺跡  | 22御所跡    | 39門正寺    |
| 6 塚の越遺跡  | 23大藏前跡   | 40向徳寺    |
| 7 堂山下遺跡  | 24菅谷館跡   | 41正法寺    |
| 8 代正寺遺跡  | 25河越氏館   | 42平沢寺    |
| 9 宿ヶ谷戸遺跡 | 26藤呂氏館   | 43田波目城   |
| 10三福寺    | 27別所屋敷   | 44實方城    |
| 11大類氏館   | 28粟生田氏館  | 45青鳥城    |
| 12毛呂氏館   | 29小代氏館   | 46松山城    |
| 13大塚屋敷   | 30高坂刑部館  | 47熊井城    |
| 14大河原氏屋敷 | 31足利基氏館  | 48小倉城    |
| 15新福陣屋   | 32野本氏館   | 49越畑城    |
| 16善能寺    | 33比企能員館  | 50苦林野古戦場 |
| 17長岡氏館   | 34満福寺    | 51笛吹峠    |

第8図 周辺遺跡の分布図

われた時代と見られる。

遺跡南側に広がる毛呂台地上には、先ず、入西耕地をほぼ一望できる位置に三福寺が存在する。本寺は浄土宗寺院で開創の時期は不明であるが、『新編武蔵風土記稿』には「薬師堂ニテ一寺ニハアラス」と記載されている。江戸時代の平田家文書の研究によると『小山村名寄取帳』には「薬師堂作」の記録がみえ三福寺の前身が薬師堂であったことがわかる。本尊の薬師如来座像は鎌倉時代初期の慶派の仏師によって造られ、檜の寄木造りにより漆箔がほどこされている。また、境内からは古瀬戸の四耳壺・瓶子と常滑の大甕が出土しておりこれらは13～14世紀に比定されている。さらに、同寺の墓地から永仁・元応・元享などの鎌倉時代の板碑をはじめ75基以上の板碑を出土している。『坂戸市史』中世資料編Ⅱ) また、本寺の東側の小字東山からは密教法具を出土し、浅羽氏と薬師堂の関係が注目される。

この他、三福寺の東側には大法寺が存在し、寺域の北西には鉤の手状の土塁が残る。金井遺跡の南側には大福寺が存在しこれら3か寺が金井遺跡と同一台地上に近接する寺院である。金井遺跡の西側には「カンノンミチ」と呼ばれた南北に伸びる街道が存在し、この道は東松山の正法寺へ通じる道から由来しているようだ。この道を挟んだ台地先端部に堀込氏館跡と推定される場所が存在する。堀込氏は浅羽氏から分家した一族であり、三福寺と同様に入西耕地を臨む位置に所在している。

入西耕地を隔てた自然堤防上の微高地には北浅羽の地名が残りここに満福寺が所在する。本寺は浅羽氏の菩提寺と伝えられ徳治二年(1307年)造立の浅羽行成供養板碑が現存している。

このように越辺川の右岸に広がる経済的基盤である入西耕地を中心として、周囲の丘陵先端部には、館や寺が造られ開発領主的景観をもっている。しかし、鑄造遺跡としての金井遺跡の存在意義が単に浅羽氏や周辺寺院に供給するためだけに存在したのか解明すべき問題と言える。

入西遺跡群から目を外に向けてと遺跡群の西1キロ程の所には鎌倉街道上道が往還し、河川交通路であったと考えられる越辺川と交差する右岸には、苦林の宿が存在する。堂山下遺跡(宮瀧1991)はこの宿跡の可能性が想定されており、しかも、この一帯は苦林野と呼ばれ貞治2年(1363年)には室町幕府鎌倉公方足利基氏と越後国守護芳賀禪可の軍勢が激突した苦林野合戦場として有名である。すぐ西には中世寺院で知られる崇徳寺跡が存在し、調査の結果、寺域は東西50m、南北65mで、中心部分は22×22の方形に1mの堀をもち、周囲に低い土居を巡らす。遺構は東墓・中墓・西墓を検出し、出土遺物には古瀬戸瓶子、常滑壺・甕、在地甕がある。崇徳寺の年代は陶磁器から13世紀後半から14世紀初頭と位置付けられ、検出された板碑の造立年号は1310年から1382年の期間であり14世紀初頭には崇徳寺が造立されていたものと考えられている(梅沢1991)。

越辺川左岸には、円正寺が存在し、寺域内の畑から金刺重弘作の応安4年(1371年)銘の雲版を出土した。鎌倉街道を北に進むと笛吹き峠を越え嵐山町の大蔵館に至りこの地の向徳寺には宝治3年(1249年)武州小代で製作された阿弥陀三尊像が納められている。越辺川下流には入間台地の先端に村山党の山口氏の子孫山口家俊の子家恒が平安時代末に石井の地に館を構え勝氏と称した。

金井遺跡B区を取り巻く周辺の歴史的環境は鎌倉街道上道と河川交通路越辺川の交差路に当たり、越辺川流域を治めた鎌倉御家人入西氏(後に浅羽氏)の所領であった。また、中世館とともに多くの寺院が残されている。入西遺跡群の理解とともに地域の歴史的環境が明らかになってきた。

### 3 入西遺跡群の概観

開発面積119万㎡の内、遺跡として確認されたのは12遺跡延べ39万㎡である。占地の違いから遺跡の立地する環境は大きく異なる。つまり、開発地の南西部、毛呂台地の北側斜面に位置する塚の越遺跡は標高35m、沖積地との比高差6mである。同様に南東部に位置する金井遺跡B区、足洗遺跡も毛呂台地上に位置する。これに対し、他の8遺跡は埋没ローンを主体とする標高27~30mの沖積微高地に占地しており、高麗川、越辺川による冠水の影響が認められる。

【金井遺跡B区】毛呂台地の北東端に位置し、調査面積は20,000㎡で、標高31m、沖積地との比高差は3mである。検出された遺構は、7世紀~9世紀にかけての住居跡30軒、掘立柱建物跡13棟の他、13世紀~14世紀の鋳造関連遺構は、溶解炉2基、鋳造遺構群15ヶ所、掘立柱建物跡13棟、井戸跡14井、粘土探掘坑3ヶ所、土壌273基、溝跡53条の他、集石土壌2基、火葬墓16基が調査された。特に、中世の鋳造遺構の検出は当該期の鋳物師集団の生産活動の実態を知る資料として、関東地方では初めての調査例である。遺物は台地上面と、二段にわたって形成された斜面及び平場から鋳造関連遺構を中心におびただしい鉄滓、銅滓が認められ、鍛冶炉から鍛造剥片、溶解炉周囲の土壌から梵鐘の鋳型片(龍頭、乳、笠型、帯、駒の爪、撞座)を多量に出土した。また、仏像鋳型、仏具鋳型、獣脚鋳型、鍋の鋳型、唐草紋様をもつ蓋状の鋳型など豊富な種類が確認された。(平成元年度調査 本報告書)

【金井遺跡A区】毛呂台地北東端の斜面の一部と沖積微高地に位置し、調査面積は33,000㎡で、標高27mである。調査区は東西方向に2本の小支谷が入り島状の景観をなしている。検出された遺構は住居跡73軒(古墳時代後期44軒、奈良時代13軒、平安時代16軒)、土壌700基(古墳時代後期~中世)、井戸跡16井(古墳時代後期~平安時代)、溝跡50条、掘立柱建物跡9棟、ピット多数が調査された。集落は古墳時代が北側の谷を挟んで東西に、奈良時代には北と南の谷の間に、平安時代は西側にそれぞれ時代毎に変遷がみられる。中世関係は土壌のなかから鋳造関係に使用されたと考えられるものが含まれており、鉄鍋の鋳型片を検出した。これらは、北側に隣接する金井遺跡B区同様、中世鋳物師集団の生産跡と考えられ、調査区外の部分を含めた関連領域はかなり大規模なものとなるのが想定できる。(昭和60年度調査 事業団報告第86集)

【足洗遺跡】狭小な島状の台地に占地し、調査面積は16,500㎡である。7世紀後半~9世紀を中心とする集落遺跡で北側に開口部をもつ馬蹄形を呈する。検出した遺構は住居跡40軒、掘立柱建物跡29棟、井戸跡18井、土壌193基で、内縄文時代後期の住居跡1軒が含まれる。住居跡は台地中央部に集中して多くの新旧関係をもち、掘立柱建物跡は南西と北東に集中するが、主軸方位は群間で異なる。(平成元年度調査 事業団報告第136集)

【稲荷前遺跡A・B・C区】毛呂台地の北側に広がる沖積微高地に位置し調査面積は48,000㎡で、東に田島遺跡、北東に桑原遺跡、北に棚田遺跡、南に塚の越遺跡がそれぞれ隣接している。調査区は東西に走る谷地により南北に分割され、更に北側は北から入る谷地により東西に分割されることから3ヶ所の調査区となり、南から時計回りにA・B・Cと呼称している。検出された遺構は入西遺跡群中最も遺構の分布密度が高いA地区からは奈良・平安時代の住居跡136軒、土壌295基、井戸



跡47井、溝跡39条、掘立柱建物跡31棟、特殊遺構6基が調査され、B地区からは古墳時代前期の方形周溝墓17基、古墳時代前期～奈良・平安時代の住居跡85軒、土壇62基、井戸跡14井、溝跡9条、掘立柱建物跡6棟、特殊遺構1基が、C地区からは古墳時代前期の方形周溝墓19基、古墳時代前期～奈良・平安時代の住居跡94軒、土壇137基、井戸跡30井、溝跡30条、掘立柱建物跡11棟、特殊遺構4基が調査されている。特に、方形周溝墓は北縁に東西に分布しており、桑原A遺跡、広面B遺跡、中耕遺跡に至る一大墓域群を形成している。8・9世紀の遺構からは鳩山窯跡産の須恵器が多量に出土され、円面硯、獸脚付短頸壺、鉄鉢形鉢などの特異な器種がみられる他、「内」の印刻をもつ資料、意味不明の墨書「□尺本」、「大里郡」、「多摩郡男川」等律令期の武蔵国に実在した郡名が複数読み取れる8世紀中頃の墨書土器が出土している。中世の集落跡を検出した。出土遺物から13世紀～16世紀と推定され建物跡、井戸跡、溝跡を確認した。(昭和61～63年度調査 A地区に関しては事業団報告第120集)

【塚の越遺跡】毛呂台地の北東部に位置し、調査面積は35,000㎡で、標高35m、沖積地との比高差は5～8mである。検出された遺構は、住居跡82軒(縄文時代中期2軒、弥生時代中期2軒、6世紀末～8世紀代78軒)、前方後円墳1基(6世紀前方部調査)、掘立柱建物跡9棟(奈良・平安時代)、土壇274基(中世)、井戸跡247井(奈良時代～中世)溝跡78条(奈良時代～中世)、火葬跡1基である。住居跡は4.5m×5.0m前後の比較的小型のものが多く、古墳時代後期のものには屋外への排水溝をもつ住居跡が存在する。掘立柱建物跡には1m余りの掘り方をもつ3棟が含まれ、総じて3間×2間の母屋を基本とする。廂持ちの建物も2棟検出された。溝跡は区画性が高く、井戸跡及び検出されていない建物群との組み合わせが想定される。前方部のみ調査された前方後円墳の周溝からは、ほぼその全容を知られる正装男子人物埴輪、盾持人物埴輪の他、女子人物埴輪、馬形埴輪の鞍橋部分、そして12個体分の円筒埴輪が出土している。中世関係は、建物跡・溝跡・土壇を検出し火葬墓から青銅製五銛杵が、青銅製神像が遺構外から出土している。(昭和61年度調査事業団報告第101集)

【桑原A遺跡】調査面積は30,000㎡で、住居跡102軒、掘立柱建物跡21棟、土壇42基、井戸跡20井、溝跡25条、方形周溝墓2基(事業団報告第89集 広面遺跡に収録)である。遺跡の立地する低位台地は南から北に解析する谷地により東西に二分されており、遺構分布も様相を異にしている。東側部分は方形周溝墓2基以外に遺構の検出はない。これらの方形周溝墓は本来、北東に隣接する広面B遺跡の方形周溝墓群に包括されるもので、両遺跡を隔てる浅い谷地を超えて古墳時代前期の墓域が西に拡大した結果とみることができる。これに対し、西側部分は6世紀中葉を初現とする集落が以後最低半世紀程の間に建て替えをくり返し、安定した集落構成がみられる。集落は越辺川の侵食作用で生じた台地縁辺の崖線を北限とし東西は浅い谷地により画され、南限は集落の初現段階に設けられた幅2mの規模を有する23号溝跡により画される。内部は南北にそれぞれ30軒前後の住居跡の集中がみられ、その間に23号溝跡と並行するかたちで15号溝跡が配されている。15号溝跡は該期の住居跡との新旧関係を有する他、石製模造品が複数検出されており、集落内における重要な位置を担っていたものと考えられる。中世関係は14・15世紀に居住した痕跡が認められ「く」の字状の溝・井戸・土壇・建物跡を検出した。(昭和63年度調査 事業団報告第121集)

第1表 入西遺跡群一覧表

遺跡名	調査面積	昭和 60年度	61年度	62年度	63年度	平成 元年度	2年度	主な検出遺構	時期	報告書		
金井遺跡B区	20,000㎡							住居跡30軒 掘立柱建物跡26棟 井戸跡14井 土壇273基 溝跡53条 溶解炉2基 鋳造遺構群15ヶ所 粘土採掘坑3ヶ所 集石土壇2基 墓壇16基	古墳 平安 室町	奈良 鎌倉 江戸	事業団報告 第146集 (本報告書)	
金井遺跡	33,000㎡							住居跡73軒 掘立柱建物跡9棟 井戸跡16井 土壇700基 溝跡50条	古墳 平安	奈良 鎌倉 室町	事業団報告 第86集	
足洗遺跡	16,500㎡							住居跡40軒 掘立柱建物跡29棟 井戸跡18井 土壇193基	縄文 平安	古墳 鎌倉 室町	奈良 室町	事業団報告 第136集
稻荷前遺跡 (A・B・C区)	48,000㎡							住居跡315軒 掘立柱建物跡48棟 井戸跡91井 土壇494 溝跡88条 方形周溝墓36基 特殊遺構1基	古墳 平安 室町	奈良 鎌倉 江戸	事業団報告 第120集 第145集	
塚の越遺跡	35,000㎡							住居跡82軒 掘立柱建物跡9棟 井戸跡247井 前方後円墳1基 土壇274基 溝跡78条 火葬跡1基	縄文 奈良 平安 室町	古墳 奈良 鎌倉 江戸	事業団報告 第101集	
桑原A遺跡	30,000㎡							住居跡102軒 掘立柱建物跡21棟 井戸跡20井 土壇42基 溝跡25条 方形周溝墓2基	古墳 平安 室町	奈良 鎌倉 江戸	事業団報告 第121集	
桑原B遺跡	2,000㎡							水田跡 堀跡	古墳		事業団報告 第121集	
広面A遺跡	10,500㎡							土壇14基 溝跡2条 井戸跡	古墳	江戸	事業団報告 第89集	
広面B遺跡	9,500㎡							方形周溝墓20基	古墳	鎌倉 室町	事業団報告 第89集	
中耕遺跡	35,000㎡							住居跡86軒 方形周溝墓68基	縄文 古墳	弥生	事業団報告 第125集	
田島遺跡	27,000㎡							住居跡6軒 掘立柱建物跡7棟 井戸跡9井 土壇7基 溝跡9条	古墳			
棚田遺跡	33,000㎡							住居跡28軒 井戸跡5井 土壇7基 溝跡2条 畦状遺構1ヶ所	古墳 平安	奈良		

〔桑原B遺跡〕 桑原A遺跡の北に広がる沖積地。プラント・オパール調査の成果を基に水田跡の確認調査を実施した。その結果、大群の一部を検出したが、自然流路からの引込み溝、或いは畦畔の単位・形状を明確にするには至っていない。周囲から7世紀の須恵器(坏・壺)が出土している。調査面積は2,000㎡。(昭和62年度調査 事業団報告第121集)

〔広面A遺跡〕 広面B遺跡の南に位置し、調査面積は10,500㎡で東西30m、南北40m程の標高28mの沖積微高地である。当初、塚群の存在を想定した領域であるが、検出された遺構は溝跡2条、

土壇14基、井戸跡で所産時期は出土した土鍋、カワラケ、陶磁器類から概ね中世と考えられる。(昭和60年度調査 事業団報告第89集)

【広面B遺跡】調査面積は9,500㎡で、東西60m、南北90m程の沖積微高地に位置し、遺構は方形周溝墓20基が主たる遺構で生活した痕跡を残さない純粋な墓域としての領域である小規模な谷地を挟んで北東には中耕遺跡、南西には桑原A遺跡に方形周溝墓群が直線的に連なり4世紀代の一大墓域群を形成している。墓域の中央に位置する通称柵塚(SZ09)は、溝を含めた規模が東西52m×42mにもおよび、当該地域の発生期古墳と比較しても遜色のない規模といえる。また、2m程の盛り土が遺存し、南東及び北東に長さ3m程の張り出し部が確認されたことに加え、南西には斜位に掘り残した陸橋を設けるなど方形周溝墓としては珍例に属する。柵塚の周囲を取り巻く周溝墓は溝の形態により、四隅を残すタイプ、一周するタイプ、方台部中央が切れるタイプ、隅の一部が切れるタイプなど多彩である。出土遺物は壺、小型壺、埴、器台、台付甕など全て土器で、甕類を除く器種には赤彩を施す例が多い。(昭和62・63年度調査 事業団報告第89集)

【中耕遺跡】沖積微高地に位置し、調査面積は35,000㎡である。方形周溝墓68基(弥生時代終末期〜古墳時代初頭)、住居跡86軒(縄文早期〜中期10軒、弥生時代終末〜古墳時代初頭の集落76軒)が調査されている。方形周溝墓は、方台部の一辺が10mを超える大型のものから一辺4mに満たないものまで規模に大きな幅をもつ。大型の周溝墓の内3基に1m程の盛り土が遺存する。平面形は周溝が全周するもの、四隅の切れるもの、一辺の中央が切れるもの、隅の一部が切れるものが存在する。周溝墓は集落が廃絶されて間もなく構築された。出土遺物は周溝から東海系、吉ヶ谷系などを含む底部穿孔の壺、甕、埴、器台、高坏などの土器類の他、一木造り二又鋸などの木製品、住居跡は方形プランが一般的で、中央に炉跡を設ける。大半が火災にあっている。遺物は日常の煮沸具、供膳具の他異形土器の出土も多数認められる。(平成元・2年度調査 事業団報告第125集)

【田島遺跡】毛呂台地の北東に連なる低台地(標高29m)に位置し、調査面積は27,000㎡で、西に稲荷前遺跡、北東に棚田遺跡、北には桑原遺跡が隣接する。検出された遺構は、古墳時代後期の住居跡6軒、掘立柱建物跡7棟、土壇7基、溝跡9条、井戸跡9井、ピット89基である。掘立柱建物跡は掘り方が小規模であることから中世以降の所産と考えられる。調査区の北を東西に画する第1号溝跡からは6世紀前半の土器が多量に検出された。本来、第1号溝跡は6世紀前半に形成された桑原遺跡の南限を意図した溝である。集落については、稲荷前遺跡に帰属する内容と思われる。(昭和63年度調査)

【棚田遺跡】毛呂台地の北に広がる沖積微高地に位置し、調査面積は33,000㎡で、標高28.5mである。検出された遺構は住居跡28軒(6世紀前半)、溝跡2条、畦状遺構1ヶ所、歴史時代の井戸跡5井、土壇7基である。住居跡は3〜6軒を一単位のまとまりとして6ヶ所程が確認された。出土土器から桑原遺跡に若干先行する段階と考えられ、当該地域におけるカマド導入後間もない時期に位置付けられる。南限を画する溝は東に向かい、桑原遺跡(24号溝跡)、田島遺跡(1号溝跡)を経由して更に東方に延びる。時期は田島遺跡の一括資料から6世紀前半と考えられる。(昭和63年度調査)

### III 遺跡の概観

金井遺跡B区は東西120m、南北180m、調査面積20000㎡におよぶ中世の大鉄造遺跡である。遺跡は小字名の金井にあたりその中でも東側に位置し、北側は既に金井遺跡(A区)として調査・報告されている。本遺跡の西側部分の畑地も字金井に含まれることから遺跡範囲が広がるものと考えられ、西端には古社金山神社が祀られ字金井の地にふさわしい景観をしている。遺跡は毛呂台地の北東先端にあたり、入西条里の施行されたと思われる沖積地が一望できる位置にある。

古代の遺構は竪穴住居跡30軒、掘立柱建物跡13棟、土壌を検出した。古代の集落は台地上及び緩斜面部、そして、一段低い低台地上にも検出した。さらに隣接する足洗遺跡や金井遺跡A区にも存在する。集落の開始時期は本遺跡とA区が7世紀前半であるのに対し足洗遺跡は5世紀末～6世紀初頭の時期に集落が造られ、一度途切れた後、7世紀前半から再び集落が始まる。いずれの遺跡も終焉は9世紀末にはこの台地上から姿を消す。

出土物は集落開始時期に比企型環と口縁部に段をもつ模倣坏を共存させ長胴甕を伴う。7世紀後半には退化形態の比企型環と北武蔵型坏を共存させ、8世紀、南北企窯跡の成立と共に須恵器製品の供給が多くなり、これまで、土師器に依存していた供膳具は須恵器に変化する。9世紀後半には灰釉陶器を出土する。

中世の遺構は調査区全体に分布する。検出された主な遺構は、溶解炉2基、鋳造遺構群(SS)15箇所、掘立柱建物跡(SB)13棟、井戸跡14基、溝跡53条、土壌273基、粘土探掘跡3箇所、炭焼き窯1基などである。鋳造遺構は台地上の平坦部分から東側の二段からなる緩やかな斜面部に大規模に検出された。

遺構が広範囲にわたるため調査区を第1～7区に分割し各区毎の遺構と遺物について鋳造跡、掘立柱建物跡、溝跡、井戸跡、土壌、火葬墓の順で報告する。

第1区には第1鋳造遺構群を含む台地中央部分、第2区は第2～4鋳造遺構群を含む台地東側の縁辺部分、第3区は第5～13鋳造遺構群を含む東側緩斜面、第4区は第14・15鋳造遺構群を含む台地北東端の東側緩斜面部、第5区は北東端の低台地部分、第6・7区は台地の北端部分である。

第1区は台地平坦部にあたり調査区の中でも標高31.0mと高い位置に当たる。本区からは第1鋳造遺構群(SS01)を検出した。不整形の南北に長い鋳造土壌内からは鍋鋳型、容器鋳型、羽釜鋳型を出土し、鋳物道具は三叉状土製品、半球状土製品を出土。また、遺構埋土中からは青磁碗を検出した。第1鋳造遺構群の南西には方形の第1号土壌からは砂質土を覆土にもつ。また、北側の第4号土壌からは焼土とともに多量の滓を検出した。これら生産遺構の南側には直径4.00m、深さ4.50mの井戸跡を確認。さらに南側には2×3間、3×4間の建物跡を検出した。

第2区は未調査区を挟んで東側の台地上に展開する地区である。本区の最大の特徴は鋳造作業に必要な粘土の採集遺構が存在し、小規模の土壌を多く検出したことにある。検出された遺構は第2・3・4鋳造遺構群と第1～3号粘土探掘跡を確認し、また、鍛冶炉を伴う第85号土壌(竪穴状遺構遺構)、第1号炭焼き窯跡と鋳造の作業のためと考えられる土壌群である。本区の中心的な鋳造遺構群である第2鋳造遺構群(SS02)からは第1鋳造遺構群からも出土した容器状鋳型を検出した。

東側には第22号溝跡が南北に走り覆土中からは中世陶磁器とともに鋳造遺物を多量に出土した。また、南側には大型の第19号掘立柱建物跡を検出。

第3区は調査区の東側に形成された二段からなる緩斜面を中心とした地区でこの斜面部分を利用した鋳造遺構群を検出した。確認した鋳造遺構群は第5～13遺構群で、斜面部は多量の鋳造遺物を含む厚い堆積層で覆われていた。第5鋳造遺構群からは第1・2号溶解炉と、炉の南側からは多量の梵鐘鋳型を出土した第1～10号鋳造土塊を検出した。第10鋳造遺構群からは梵鐘鋳造土塊を検出し、このうち、第1号鋳造土塊は底面に掛け痕が見られ、第7号鋳造土塊内からは梵鐘鋳型をまとめて出土した。第5・7・8・10遺構群は梵鐘鋳造に関わる跡と考えられる。一方、第6鋳造遺構群からは大型の獣脚鋳型を出土。第11鋳造遺構群からは仏像・髻・注ぎ口・飾り金具等の仏具鋳型を出土し、鋳造生産の様相が異なる。注目すべき遺構として本群からは輻座の跡を検出した。第9・13は滓や炉壁片を中心として出土し遺構は検出されず廃滓場と考えられる。

第4区は調査区北側にあたり第3区からの緩斜面が続き、この斜面部分に第14鋳造遺構群が存在し、容器鋳型の据えられた鋳込み跡と炉跡を検出した。その東側には廃滓場を主体とした第15鋳造遺構群が存在する。

第5区は北側の低台地に検出された土塊墓群と溝跡である。第6・7区は調査区北西にあたり台地の北西端である。井戸跡、土塊、溝跡を検出したが、第7区の第50号溝は第1区の第4号溝と対峙する断面「V」字型の深い堀である。

出土遺物は鋳型・鉄塊、炉壁、銅滓、鉄滓、羽口等の鋳造遺物と生産道具・陶磁器・木製品などである。これらは各遺構や斜面に形成された堆積層中から出土した。

鋳型は日常用品と仏具用品とに大別できる。日常用品としては、第1鋳造遺構から検出した口径27cm、底径22cmの鍋鋳型やコップ状容器鋳型、口縁部に段をもつ羽釜と見られる鋳型や大釜の鋳とも考えられるドーナツ状の鋳型、そして犁鋳型を検出した。仏具用品の鋳型は斜面部に形成された第5～15鋳造遺構群から検出され、梵鐘、小仏像、獣脚、火舎などの容器、髻、釘の目隠しに使われたと考えられる飾り金具、蓋や吊り灯籠などのつまみ、水差しの注ぎ口等の鋳型を検出した。

道具は鋳型成形に使う鉄製のハタマワシをはじめとするヘラ状工具を検出。また、三叉状土製品や半球状土製品、砥石を検出した。金井遺跡A区からは鍋鋳型とともに鉄製の篋を検出している。陶磁器は青磁・白磁をはじめ渥美・常滑・瀬戸窯の製品を検出した。在地産では内耳鍋や壺、土師貫皿、片口鉢を検出した。木製品は曲物、椀、きぬた、オシキ等でその多くが井戸跡からの検出である。

中世の遺構・遺物における遺跡の年代観については大きく2時期あることが判明したつまり鋳造を主体とした時期と建物跡・井戸跡を含む集落としての時期である。鋳造の時期は陶磁器から見ると第1鋳造遺構群から検出された凌ぎ連弁の龍泉窯系の青磁椀や画花文の銅安窯系の青磁椀、白磁皿の出土していること。そして、常滑の甕に13世紀中葉から後半の資料があること、また、瀬戸の四耳古や渥美の甕が13世紀の前半に位置づくことである。鋳型から見ると梵鐘撞座が13世紀後半から14世紀前半の文様であること。集落の時期は多くの井戸跡から検出された常滑、瀬戸・美濃をはじめ在地産の片口鉢、内耳鍋等の遺物から14世紀中葉から15世紀と考えられる。

中世の鋳造遺跡は長野県寺平遺跡、京都府京都大学構内遺跡、大阪府真福寺遺跡、福岡県大宰府

鉾の浦遺跡とともに関東において代表的な遺跡である。金井遺跡での鋳物師の活動を記した文献資料や伝承は伝えられていないが、ただ金山神社のみがその存在を今に伝えてきた。ここに金井遺跡の様相が初めて明らかとされる。



金井遺跡B区



第9图 金井道跡B区全体图

## IV 古代の遺構と遺物

### 1 住居跡

金井遺跡B区から検出された古代の竪穴住居跡は30軒、掘立柱建物跡は15棟、このほか土壌を検出した。古代の集落は台地上及び緩斜面部、そして、台地より一段低い北東の低台地上にも遺構を



第10図 古代の遺構全体図



検出した。さらに、隣接する足洗遺跡や金井遺跡A区でも古代の遺構の広がりを持ち、いずれも、小単位ではあるが集落を形成していたものと考えられる。集落の開始時期は7世紀前半にあたり、入西遺跡群の中で最も規模の大きな稲荷前遺跡でも集落の開始時期は同様で、土器から考えられる時間的変遷によれば本集落の開始時期は稲荷前III期に比定される。また、本集落の終焉は9世紀末と見られ、この台地上から金井遺跡B区をはじめA区・足洗遺跡の姿は消えることになる。これらの現象は近接する南比企窯跡群の終焉時期とも共通し、本地域に大きな変化があったものと考えられる。

出土物は集落開始時期に比企型環と口縁部に段をもつ模倣杯を共伴させ長胴甕を伴う。7世紀後半から8世紀初頭になると退化形態の比企型環と北武蔵型杯を共伴させ児玉地域を中心とした土師器杯の供給を受ける結果となる。一方で、北武蔵では南比企窯跡の製品の供給を受ける点で両者間の交流が大きくこの時期発展したものと考えられる。いずれにしてもこれ以降本地域では、8世紀前半から南比企窯跡の成立と共に須恵器製品の供給が多くなり、これまで、土師器に依存していた供膳具は須恵器へと移行し、煮沸具は北武蔵系の甕に遺存する。第12号住居跡からは盤状杯を検出し、南比企産の擬宝珠つまみとリング状つまみをもつ須恵器蓋が見られる。9世紀後半には灰釉陶器も出土する。

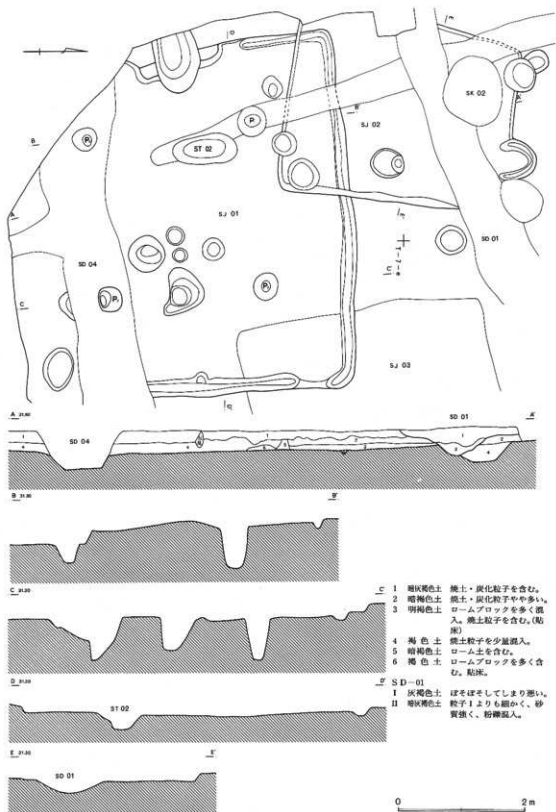
#### 第1号住居跡（第11図）

T-6・7区に位置する。調査区の南西隅にあたり南壁は調査区外に延びる。本住居跡は、第4号溝・第2号火葬墓・第2号住居跡・第3号住居跡によって壊され、平面形態はほぼ方形と推定される。残存規模は長軸5.60m、短軸5.45m、深さ35cmであり、比較的大型の住居跡といえる。主軸方向はN-105°-Wである。

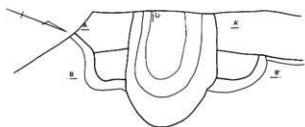
床面はやや凹凸が見られるが、全体にはほぼ平坦で中央部分を中心に堅く踏み固められ、また、全体に黄灰色砂質粘土を敷き詰めた貼り床をもつ。柱穴はP1～P4が本住居跡の主柱穴と考えられ、それぞれの深さはP1が75cm、P2が61cm、P3が29cm、P4が29cmである。壁溝は幅18～25cm、深さ8cmであった。

カマドは西壁の中央部に設置され、規模は長さ90±5cm、焚口幅65cmである。構造は燃烧部の掘り込みが30cm程と深く、第3層に灰層を確認した。カマド袖および天井部は暗黄褐色の粘性の強い砂質粘土によって造られ、袖は壁から20～30cm程と短い。煙道部は調査区域外のため確認できなかった。

出土物は、底部がやや丸底気味で口縁部が上方に立ち上がる北武蔵型の土師器杯を覆土中から検出した。3～10・13・14は須恵器杯で口径はいずれも12cm代で、底径は7cm前後である。底部外面は糸切りの後、外周回転ヘラケズリを施す。8は底部外面に「×」印の窠記号が見られ、11は佐波理模倣椀（稜椀）の退化形態と考えられる。稜部は沈線が見られず、鈍い稜のみで、口唇部にはシャープな面をもたない。15は焼きの良い底径10.3cm、高台径8.7cmとやや大きめの貼り付け高台杯である。土師器甕は、口縁部の形態が「く」の字段階を主体とし、一部「コ」の字状口縁も見られる。29は底径が小さく器内も薄いことから「コ」の字状口縁甕の底部と考えられる。本住居跡跡



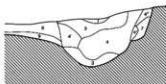
第11図 第1・2号住居跡



lu

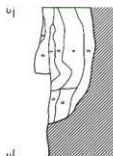
A B C

K



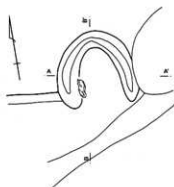
B

C



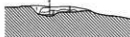
ul

- 1 赤褐色土 焼土層。
- 2 暗褐色土 砂質粘土。粘性強い。
- 3 灰色土 灰層。炭化・焼土粒子含む。
- 4 明褐色土 砂質粘土。粘性もつ(天井部崩落土)。
- 4' 明褐色土 砂質粘土。焼土ブロック含む(天井部崩落土)。
- 4'' 明褐色土 粘土。被熱し、炭土化している。
- 5 明褐色土 砂質粘土。粘性もつ。
- 6 明褐色土 砂質粘土。炭・焼土混在。
- 7 暗褐色土 炭化・焼土粒子を含む。
- 8 褐色土 褐色粘土主体。焼土含む。
- 9 暗褐色土 炭化・焼土粒子を含む。



A B C

K



- 1 暗褐色土 焼土粒子を含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒子を含む。
- 3 赤褐色土 焼土を主体。
- 4 暗褐色土 灰多く、焼土粒子少量含む。

0 1 m

第12図 第1・2号住居跡カマド

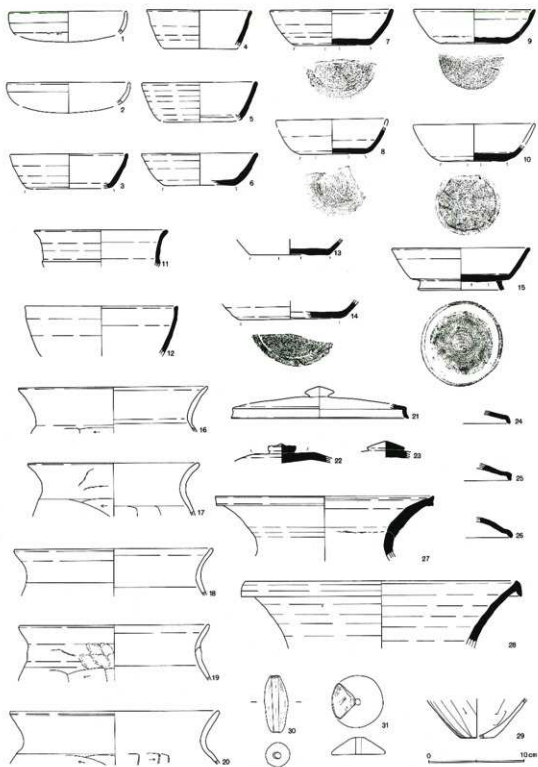


第13図 第1・2・3号住居跡遺物分布図

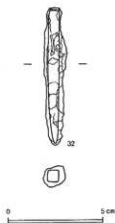
からは口縁部破片が多く検出されたものの全体を知る完形品の出土はなかった。

30は土錘、31は石製紡錘車である。32は鉄製釘で、残存長7.2cm、幅6cmである。33は中世の石臼である。

時期は出土遺物にややばらつきが見られる。1・2の北武蔵型坏はやや古く8世紀第三四半期と見られる。土師器甕には坏と同様の時期とやや後出と考えられる「コ」の字状口縁甕が少量ながら共伴する。しかし、須恵器は口径12cm後半代のもが多く含まれ、底径もやや大きい。また、11の



第14图 第1号住居跡出土遺物(1)

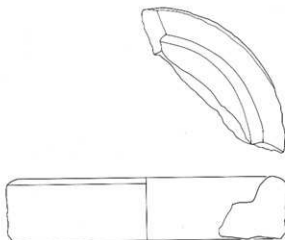


第15図 第1号住居跡出土遺物(2)

稜椀が伴うことから本住居跡の時期は稲荷前Ⅸ期と考えられる。

石臼は、本住居跡の覆土上面で検出した。本住居跡は、中世の第4号溝跡が東西方向に走り居床面を大きくえぐられ壊されている。このため、石臼が混入したものと考えられる。

石臼は本来その出現時期が問題とされており注目すべき資料である。しかも、本遺跡は中



第16図 第1号住居跡出土遺物(3)

第1号住居跡出土遺物観察表 (第14~16図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.3)			ABCD	B 淡褐色	5%	覆土
2	坏	(12.8)	3.2		ABCD	B 淡褐色	30%	覆土
3	坏	(12.2)	3.6	(9.2)	CDF	A 青灰色	10%	No7
4	坏	(10.8)	3.7		CDF	A 青灰色	10%	No43
5	坏	(12.0)	4.1		CDF	A 青灰色	10%	No40
6	坏	12.2	3.3	7.6	CDF	A 灰色	20%	No43・45
7	坏	(12.5)	3.7	(7.8)	CDF	A 灰色	30%	No33
8	坏		2.8	6.7	CDF	B 青灰色	50%	No57
9	坏	(12.8)	3.6	7.0	CDF	A 灰色	50%	No41
10	坏		2.1	7.0	CDF	A 暗褐色	30%	覆土
11	鉢	14.0	3.8		CDF	C 黒灰色	10%	一括
12	坏	(16.2)	5.3		CDF	A 灰色	10%	一括
13	坏		1.7	(8.4)	BCDF	C 黄褐色	50%	No37
14	坏		1.9	(10.4)	CDF	A 灰色	30%	Pit5
15	高台坏	(14.5)	4.4	(8.7)	CDF	A 白灰色	50%	一括 廻り方内No13
16	甕	(20.0)	4.8		BCD	A 橙褐色	20%	No3
17	甕	(18.0)	5.6		ABCD	A 橙褐色	20%	No3
18	甕	(20.8)	4.9		BC	A 茶褐色	10%	覆土
19	甕	(20.0)	5.9		ABC	A 橙褐色	20%	No35

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
20	甕	(22.0)	5.7		ABCD	A	茶褐色	10%	No55
21	蓋	(18.9)	1.4		CDF	A	黒灰色	5%	No12
22	蓋	2.9	2.0		CDF	B	褐色	50%	No50
23	蓋	4.0	1.7		CDF	A	灰色	10%	No5
24	蓋		1.3		CDF	B	灰色	5%	一括
25	蓋		1.8		CDF	B	白灰色	5%	覆土
26	蓋		2.1		CDF	B	白灰色	5%	覆土
27	甕	(23.2)	6.8		BCDF	B	黒灰色	10%	一括
28	甕	(28.7)	7.0		CDF	A	青灰色	10%	覆土
29	甕		4.1	(3.5)	ABCD	A	黒褐色	25%	No31
30	土 鍾				ABCF	B	褐色	100%	覆土
31	紡錘車				ABC	B	褐色	25%	一括
32	鉄製釘								Pit6
33	石 臼	29.8	6.6		安山岩	A	褐色	10%	6本が一単位

世の遺構も多く第4号溝の年代を探る資料となろう。

## 第2号住居跡 (第11図)

T-6区に位置する。調査区の南西隅にあたり西壁の一部は調査区外に延びる。本住居跡は、第1号溝に壊され第1号住居跡より新しい。平面形態は、カマドを主軸方向にもつ南北に長い長方形であり、規模は長軸3.63m、短軸2.81m、深さ29cmであり、中型の住居跡である。主軸方向はN-8°-Eである。

床面は第1号住居跡を埋め戻して床面としている。第3層のロームブロックを多く含む明褐色土が第2号住居跡の貼り床であることが調査の結果明らかとなった。全体にはほぼ平坦で中央部分を中心に堅く踏み固められている。柱穴・貯蔵穴は確認されず、壁溝も確認できなかった。

カマドは北壁の東寄りに設置され、規模は長さ60cm、焚口幅43cmであり、構造は壁に取付短い袖に天井をつけ、掛け口は壁外に置き煙道はほとんど伸びないと考えられる。燃焼部の掘り込みは浅く、第4層が灰層である。

出土遺物は少なく、1はやや器面がガラガラし、底径は小さく、口唇部が肥厚して外に垂れる形態の須恵器杯である。2も器肉やや厚く赤茶

褐色の須恵器杯である。いずれも、底部は回転糸切りのままである。



第17図 第2号住居跡出土遺物

時期は稲荷前XIII期と考えられる。

## 第2号住居跡出土遺物観察表 (第17図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	杯	(12.2)	4.3	(5.6)	CF	B	淡灰色	30%	No8
2	杯		1.7	(4.05)	ACF	A	赤褐色	25%	一括

### 第3号住居跡 (第18図)

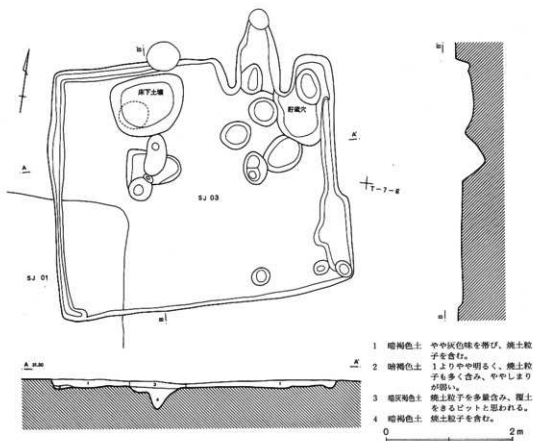
T-7区に位置し、調査区の南西にあたる。本住居跡は、第13号掘立柱建物跡・第1号住居跡に壊されている。平面形態はカマドを長軸にもつ長方形で、規模は長軸4.72m、短軸3.95m、深さ15cmで、本遺跡では中型の住居跡である。主軸方向はN-7°-Wである。

床面は地山のロームを利用し、全体にほぼ平坦で中央部を中心に堅く踏み固められていた。柱穴は検出されず、貯蔵穴がカマド右袖に近接して北東コーナーに設置されていた。壁溝は幅11~25cm、深さ6cmである。

カマドは北壁の東寄りに設置される。規模は長さ1.30m、焚口幅52cmである。構造は燃烧部の掘り込みが18cmと浅く、第4層が灰層である。カマド袖は黄褐色の粘性の強いロームによって造り出され、壁から68~60cm程住居内に伸びていた。煙道部は途中で一段幅を狭くして屋外に伸びていた。

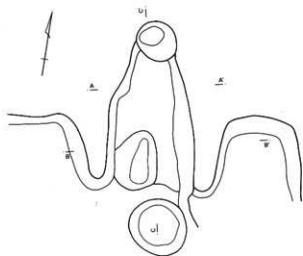
出土遺物は1・2が須恵器の坏である。1は底部回転糸切り後、外周回転ヘラケズリを施す。2は切り離しのままである。7は「コ」の字状口縁甕、8は小型台付甕底部である。

時期は稲荷前X期と考えられる。



第18図 第3号住居跡

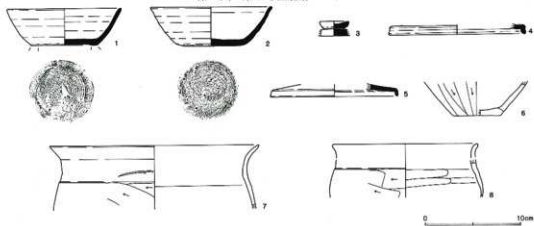




- 1 褐色土 砂質粘土。焼土粒子を含む。
- 2 明褐色土 焼土ブロックを含む。
- 3 暗褐色土 粘土、焼土粒子を含む。
- 3' 赤褐色土 焼土塊を含む。
- 4 暗灰色土 灰層。焼土・炭化粒子を含む。
- 5 灰褐色土 砂質粘土を主体。焼土粒子を含む。
- 6 暗褐色土 焼土・炭化粒子を少量含む。

0 1m

第19図 第3号住居跡カマド



0 10cm

第20図 第3号住居跡出土遺物

第3号住居跡出土遺物観察表 (第20図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.1)	3.8	7.0	CF	B	淡灰色	60%	No.1, 7, 11 S J4No3 一括
2	坏	(13.0)	4.4	5.7	BCF	C	黒灰色	70%	No.40 カマドNo1 S K53覆土
3	蓋	3.1	1.5		BCF	A	灰色		S K53覆土
4	蓋	(14.4)	1.05		BCDF	A	灰色	10%	一括

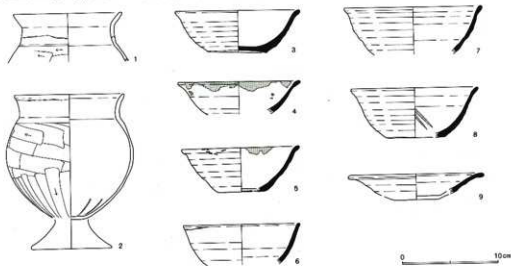
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
5	蓋	(13.5)	1.3		BCDF	A	灰色	10%	No11
6	甕		3.6	(5.0)	ABCD	B	橙褐色	40%	No54, 59 カマFNo1
7	甕	(22.2)	6.7		ABCD	A	橙褐色	20%	No35, 137 カマFNo1
8	台付甕		4.0		ABCD	B	褐色	10%	No12

#### 第4号住居跡(第23図)

S-8区に位置し、調査区の南西にあたる。本住居跡は、北側に第1号溝跡・第5号住居跡が存在し、第66号土壇に壊されていた。また、第1号掘立柱建物跡を壊している。平面形態は長方形で、規模は長軸4.04m、短軸3.05m、深さ15cmである。主軸方向はN-97°-Eである。

床面は全体的にほぼ平坦であり、北壁寄りと中央部は地山のローム面がやや硬く踏み固められている。本住居跡の主柱穴は不明である。貯蔵穴はカマド右側に検出し、直径40cm程の隅丸形状で深さ16cm程で、覆土は焼土粒・炭化粒を多く混入させ、貯蔵穴隅にカマドの灰を溜めている。壁溝は幅20~30cm、深さ6cmである。

カマドは東壁のほぼ中央部に設置され、規模は長さ80cm、焚口幅62cmである。構造は、前庭部に深さ22cmと深い掘り込みがあり、焼土粒子・炭化物ブロックを含む第10層が覆土にあたる。カマド

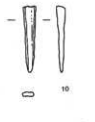


第21図 第4号住居跡出土遺物(1)

袖は右袖のみが壁から30cm程伸びるが、左袖は残存していなかった。

出土遺物は、1・2が「コ」の字状口縁の小型台付甕、3~8は、器肉やや薄くクロ目の荒い須恵器坏である。底部はやや上げ底気味で、体部は湾曲して立ち上がり口唇部は肥厚して外方に垂れる。4・5は口縁部の内外面に黒焰が付着し、8は内面に火禰の痕跡が見られる。9は須恵器皿である。10は鉄製釘で、残存長3.4cm、最大幅0.7cmである。

時期は稲荷前XIII期と考えられる。



第22図 第4号住居跡出土遺物(2)



第4号住居跡出土遺物観察表 (第21~22図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	台付甕	11.4	5.1		BCD	C	茶褐色	10%	No37
2	台付甕	11.5	13.1		ABCD	A	橙褐色	65%	No88, 92, 93, 94 カマド 覆土
3	坏	13.1	4.4	6.2	BCDF	C	淡灰色	100%	No1
4	坏	6.5	3.4		BCDF	C	淡褐色	20%	No3
5	坏	(12.5)	4.6		ABCDF	C	褐灰色	40%	Pit6
6	坏		4.2		BCDF	B	灰色	30%	No45, 46
7	坏	(14.6)	5.0		BCDF	B	褐灰色	30%	No24, 46 覆土
8	坏	(13.4)	5.1	(6.2)	BCDF	B	橙褐色	40%	No15, 69
9	皿	(14.6)	2.7		BCDF	B	褐灰色	20%	No43
10	鉄製釘								

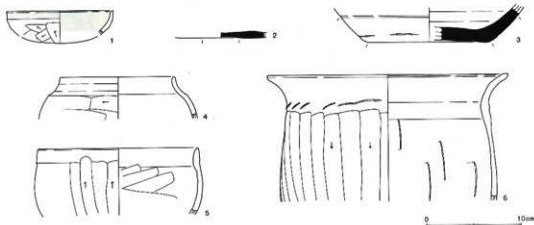
第5号住居跡 (第25図)

S-8区に位置する。調査区の南西にあたり北側には第2・3・4号掘立柱建物跡群が立ち並ぶ。本住居跡は、第1号溝・第2号井戸跡に壊されている。平面形態は方形で、規模は長軸4.22m、短軸4.15m、深さ20cmで比較的大型の住居跡である。主軸方向はN-10°-Wである。

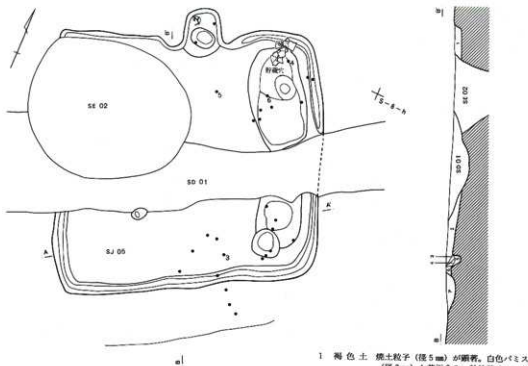
床面は重複遺構によって半分近く壊されているが、カマドの東側および南壁寄りが残り、やや凹凸が見られるものの、全体にはほぼ平坦で地山のローム面を床面とし堅い。柱穴は検出されず、カマド右側の北東コーナーに貯蔵穴を確認した。壁溝は幅20~25cm、深さ4cmである。

カマドは北壁の中央部やや東寄りに設置され、規模は長さ75cm、焚口幅50cmである。構造は燃焼部の掘り込みが床面より10cm弱と浅く、第3層は赤褐色土で被熱されており、天井の崩落土と考えられる。カマドの袖は、地山のロームがわずかに住居内にせり出して掘り残されていた。

出土遺物は、土師器坏、鉢、甕、須恵器坏、甕を検出した。1は、比企型坏の系譜をもつ坏と考えられ、口縁部外面から体部内面にかけて赤彩が施されている。2は糸切り離し後、底部外周回転ヘラケズリを施す。6は土師器甕で、口縁部横ナデを施し、口唇部内面に工具による沈線状の浅い凹みをもつ。口縁部外面には下方向のヘラケズリを施し、その際に付いた筧の当たり痕跡が残る。1と5の土師器には白色針状物質が胎土中に含まれている。時期は稲荷前Vと考えられる。

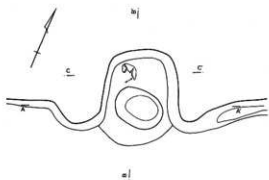


第24図 第5号住居跡出土遺物



- 1 褐色土 焼土粒子(径5mm)が顕著。白色バミス(径3mm)も若干含み、粘性強くハード。
- 2 褐色土 赤色スコリア(径5mm)、白色バミス(径2mm)を含み、粘性乏しくややハード。
- 3 灰褐色土 2に比べて、黒色の粘性土が多く混入。
- 4 暗褐色土 壁から崩落したロームブロックを混入。
- 5 暗褐色土 3に近似。テフラの混入少ない。
- 6 褐色土 ロームブロック多く、崩落した地山か。
- 7 暗褐色土 砂利、白色バミスを含む。

0 2m



- 1 灰褐色土 焼土粒子多く、粘土ブロック・粒子、灰を含む。
- 1' 灰褐色土 1に比べてローム粒子の混入少なく、焼土粒子多い。
- 2 赤褐色土 壁面の被熱痕か。
- 3 赤褐色土 崩落した天井か。
- 4 灰褐色土 白色粘土が顕著。カマド袖からの流入か。粘性が強い。
- 5 褐色土 焼土を若干含む。
- 6 褐色土 灰土・ローム粒子を含む。

0 1m

第25図 第5号住居跡・カマド

第5号住居跡出土物観察表（第24図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.2)	3.4		A B C D	A	橙褐色	20%	覆土
2	坏		0.7	4.85	B C D F	A	灰色	10%	覆土
3	甕		3.6	13.1	B C F	B	白灰色	5%	No17
4	鉢	12.0	4.4		A B C D	C	褐色	20%	No4
5	鉢	17.0	7.1		A B C D F	B	茶褐色	30%	No9
6	甕	(25.4)	13.3		A B C D F	A	茶褐色	30%	No28

第6号住居跡（第26・27図）

Q-8区に位置し、西側調査区の中央付近にあたる。本住居跡は、数多くの中世の柱穴によって壊されていた。平面形態はほぼ方形で、中型の住居跡である。規模は長軸4.80m、短軸4.33m、深さ18cmである。主軸方向はN-72°-Eである。

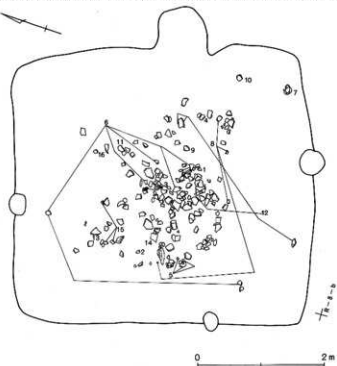
床面は、全体に平坦で地山のロームを利用し、中央部を中心に堅く踏み固められていた。壁溝は幅15~20cm、深さ7cmであり全周している。

カマドは、東壁の中央部やや南寄りに設置され、規模は長さ1.10m、焚口幅65cmである。構造は燃焼部の掘り込みが浅く、掛け口は壁よりわずかに屋内にあたると思われる。カマド袖はほとんど残らず、わずかに右袖が残存し、煙道部は屋外に伸びるが、掛け口からの距離をあまり持たない。

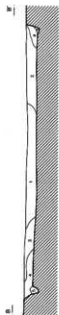
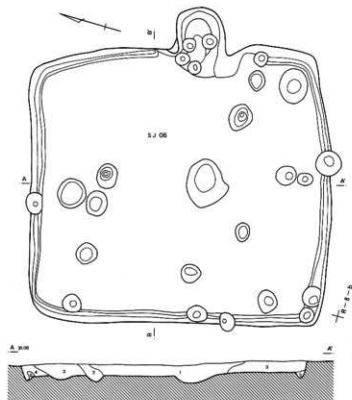
出土遺物は、住居跡中央部に集中して出土した。土層観察によれば、第1層中と考えられ、住居跡廃絶後に廃棄された遺物群として捉えられる。1は土師器環である。1は口縁が大きく開き、おそらく、体部との境に稜を持つ形態と考えられる。胎土中には白色針状物質の混入はみられない。

2~10は須恵器環である。このうち6・7は糸切り離し後、底部外周回転ヘラケズリを施す。8・10は全面回転ヘラケズリを施す。11は短頸壺で、口縁部は極めて短く肩部に張りを持って膨らむ形態である。外面には自然釉が付着しており、内面は指頭による押さえの跡が残る。器内は紫紅色をし、かなりの高温で焼成された可能性が窺える。

時期は本住居跡が稲荷前Ⅸ期、覆土廃棄された遺物群はⅩⅢ期と考えられ、時間差が見られる。このことは、廃屋の利用のされ方を考える上で貴重な資料である。

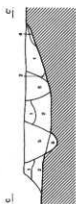
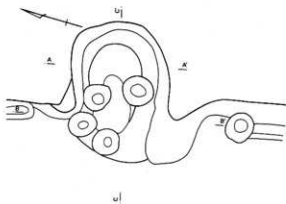


第26図 第6号住居跡遺物分布図



- 1 黒褐色土 ローム粒子、極少量の礫、粘土粒子を含む。しまりよい、ロームブロックを多量含み、粘性あり。
- 2 黒褐色土 1より黒色が強く、ローム粒子を含む。
- 3 黒褐色土 3よりロームを多く含む。壁の軟質ローム混入。粘性強い、ローム粒子・ブロックを多く含み、粘性あり。

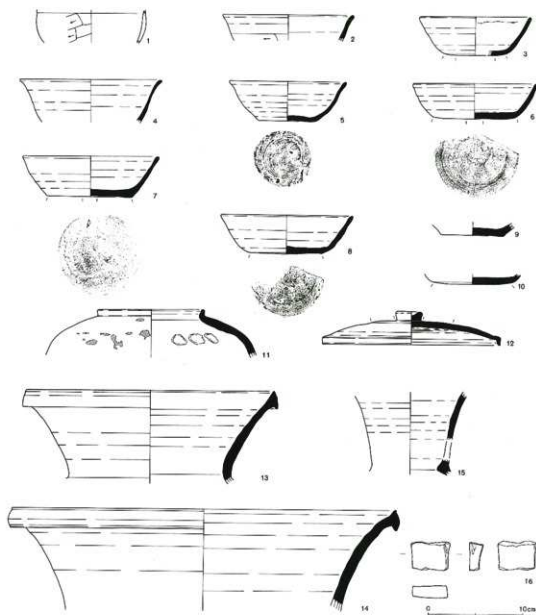
0 2 m



- 1 暗褐色土 焼土粒子、微量の炭化物、ローム粒子を含む。砂粒子を混在し、しまりややもつ。
- 2 暗褐色土 1に比べ、焼土粒子をやや多く含む。
- 3 暗褐色土 1に比べ明るく、褐色強い焼土・ローム粒子混在。
- 4 暗褐色土 1に比べやや明るく、焼土・炭化粒子は少ない。焼土・炭化粒子を均一的に含む。
- 5 黒褐色土 ローム、粘土をブロック(径1cm)状に混在。
- 6 褐色土

0 1 m

第27図 第6号住居跡・カマド



第28図 第6号住居跡出土遺物

第6号住居跡出土遺物観察表 (第28図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.4)	3.5		BCD	B	橙褐色	10%	No9
2	鉢	(13.8)	2.6		BCD	A	橙褐色	8%	No110
3	坏	(11.8)	3.8		BCDF	A	灰色	40%	No103, 126, 127
4	坏	(15.0)	4.5		BCDF	B	灰色	20%	No156, 159
5	坏	12.3	4.15		BCDF	B	黄褐色	70%	No15, 16, 27 覆土
6	坏	(13.2)	3.6		BCDF	A	赤褐色	60%	No65, 72, 110, 135, 173, 194 Pit1
7	坏	14.2	4.3	8.8	BCDF	B	褐灰色	80%	No171 Pit2
8	坏	(14.2)	4.0		BCDF	B	淡灰色	40%	No11, 82, 158, 167